

The Trade Network of Shell Money in Local History : The Historical Transitions and Present Situation of the Trade of Nassa Shells in the Bismarck Archipelago and the Solomon Islands

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深田, 淳太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003827

|||||

377

raw shell, *nassarius camelus* cannot be collected near Rabaul. Before European contact at the end of the 19th century, a trade network had been established between Rabaul and the Nakanai area on the north coast of West New Britain. The source of *tabu* shells has changed in each era. Since the 1960s, the western province of the Solomon Islands has become the main source of the shells.

There are no public transportation facilities between the western province of the Solomon Islands and Rabaul. Traders must cross the border and travel 800km in their own dinghies with outboard motors. Despite these severe conditions, some traders have engaged in this business.

To make the process clear, I conducted fieldwork in three locations, the western province of the Solomon Islands, Rabaul, and the intermediary point: Bougainville Island. During this fieldwork, I found one influential channel in this trade network. Tracing this channel, I discuss how *tabu* shells are transported from the Solomon Islands and how the *tabu* shell trade network has changed over the 130 years from the first European contact.

1 はじめに	4 ソロモン諸島ロヴィアナラグーンからのムシロガイ輸入 (2009 年)
2 ラバウルにおけるムシロガイ販売事情 (2002 ~ 2006 年)	4.1 ムシロガイを採る／加工する人々
2.1 ムシロガイ販売の実態	4.2 ムシロガイを売る／買う人々
2.2 ムシロガイ売買に関するトーライ人の態度	4.3 ブーゲンヴィル島へのムシロガイ輸出の歴史
2.3 ムシロガイの輸入元	5 ブーゲンヴィル島の仲買人 (2011 年)
3 ムシロガイ輸入の歴史	5.1 仲買人ネルソンのムシロガイビジネス
3.1 接触以前 (~ 1870 年代)	5.2 公的な形式に則ったビジネスとしてムシロガイ輸入
3.2 ヨーロッパ人との接触 (1870 年代 ~ 20 世紀初頭)	5.3 ネルソンの半生
3.3 交易の中心地ラバウル (20 世紀前半 ~ 太平洋戦争)	5.4 ブーゲンヴィル島からラバウルへ
3.4 太平洋戦争終了から独立国家へ (1942 年 ~ 1970 年代)	6 歴史的状況の中でのムシロガイ交易
	7 おわりに

1 はじめに

パプアニューギニア、イーストニューブリテン州に住むトーライ人はタブ *tabu* と呼ばれる貝殻貨幣を伝統的に用いてきた。彼らはこの貝貨タブを、婚資の支払いや儀礼の手続きなどのいわゆる慣習的な用途にだけでなく、日常的な商品売買での交換媒体としても用いている。さらに近年、イーストニューブリテン州政府の主導で、貝貨タブをパプアニューギニアの法定通貨キナを補完する第二の通貨として活用する政策が推進されており、税金や授業料などの支払いでこの貝貨が用いられている（深田 2006）。かつて世界各地で使われていた自生通貨（indigenous currency）の多くが、現在では儀礼などの慣習的な局面でのみ使われるものになっている中、トーライ社会における貝貨タブは今日においても交換媒体として使い続けられるなど、極めて強い存在感・重要性を持ち続けている現役の貨幣である。

だが、その重要性にもかかわらず、トーライ人は貝貨タブを自分たち自身では供給することができない。タブはムシロガイという小さな巻き貝を原料に作られているが、この貝はラバウル近辺にはほとんど生息していないのである。採り尽くされたのか、それとも最初からいなかったのかは定かではないが、いずれにせよムシロガイは交易によって入手するものである。これは近年になってから生じた状況ではない。19世紀後半にヨーロッパ人がこの地域に宣教や植民地経営のために入った頃には、すでにこの貝殻はラバウルから 200 キロ以上離れたニューブリテン島中央部北海岸のナカナイ地域から輸入されてくるものであった。その後、輸入元はニューブリテン島西部の北海岸や南海岸にも広がり、さらに 1980 年代以降はその最大の輸入元は国境を越えたソロモン諸島ウェスタン州になっている。

マリノフスキーが描いたマッシン諸島におけるクラ（マリノフスキー 2010（1922））やニューギニア島南岸のポートモレスビー周辺からパプア湾を中心としたヒリ（Barton 1910）、パプアニューギニア北東部からニューブリテン島西部地域におけるラヴェーン（小林 1993）など、メラネシア地域はヨーロッパ人との接触以前から地域と地域、島と島を結んで広い範囲での交易が行なわれていたことでよく知られている（Hogbin 1935; Kirch 1991; Harding 1994; etc.）。ニューブリテン島以東のビスマルク諸島からソロモン諸島にかけても、ニューブリテン島北海岸のタラセア地域で採集される黒曜石がソロモン諸島の各地で発見されていること¹⁾ や、本稿で取り扱うトーライ人自身がニューアイルランド島からニューブリテン島に移住してきた人々であること

からも分かるとおり、古くから多くの島々、地域の間で盛んに交易や人の移動が行なわれてきたことが推測される。だが、この地域において、上述のクラヤヒリのような、島と島とを結ぶ交易の調査がこれまで十分になされてきたとは言い難い²⁾。

本稿で取り扱うムシロガイも、この地域で行なわれてきた交易における中心的な交換財の一つであったことが推測される。だが、トーライ社会に調査に入った人類学者はそれがナカナイ地域やソロモン諸島などの遠方から輸入されてくることには言及しているものの (Epstein, A. L. 1969; Epstein, T. S. 1968; Salisbury 1970)、その交易の経路や具体的な方法についての詳細な調査は行っていない。本稿の目的は、このように従来あまり論じられてこなかった、ビスマルク諸島からブーゲンヴィル島、ソロモン諸島西部地域における遠隔地交易のひとつの事例として、このラバウルを中心としたムシロガイ交易を取り上げ、論じることにある。

特に中心的に記述するのは以下の二点である。一つ目は、ビスマルク諸島、ソロモン諸島およびそれを取り巻くより広い地域の歴史の中における、ムシロガイ交易の変遷についてである。ラバウルのように貝殻貨幣が今日に至るまで交換媒体として使い続けられているのは、メラネシア地域においても希なケースである。この背景の一つには、その原料となるムシロガイの交易が植民地化以降 100 年以上に渡って続けられていることがある。ヨーロッパ世界との接触、20 世紀の二つの大戦、国家としての独立、そしてブーゲンヴィル島の独立闘争と激しい社会変動があった中で、ムシロガイ交易はいかにして現在まで続けられてきたのか。広い地域を結び、多くの人やモノ、道具や制度が関わっているがゆえに、ムシロガイ交易はそれらの周囲の環境の変化に極めて影響を受けやすいものである。本稿では 19 世紀末から現在までのムシロガイ交易の歴史の変遷を追うことで、この交易に直接的に関わってきた地域およびそれを取り巻くより広い地域で生じた様々な変化が、ムシロガイ交易およびそれに携わる人々にとってどのようなものとして経験されたかの一端を描き出したい。二つ目は、この歴史的な変遷を経た後の現在のムシロガイ交易の実態についてである。ソロモン諸島西部地域で採集・加工され、仲買人の手で国境を越え、ブーゲンヴィル島を経由し、ラバウルに運び込まれ、トーライ人に販売されるまでを、その具体的なプロセスを追跡した 2009–2011 年の調査をもとに明らかにする。

以下ではこの二つの作業を次のような手順で行なう。まず第 2 章では 2002–2006 年に私が断続的に長期間にわたってラバウルに滞在していたときの調査資料から、当時のラバウルにおけるムシロガイの輸入、販売の実態、およびトーライ人にとってムシロガイ売買がもつ意味について概観する。次に第 3 章では、19 世紀末のヨーロッパ

人との接触から 1970 年代までのムシロガイ輸入の歴史的な変遷について、文献資料を用いて記述する。続く第 4 章では、2009 年末にソロモン諸島で行なった調査をもとに、現在のムシロガイ原産地であるソロモン諸島ウェスタン州ロヴィアナラグーンでムシロガイが採集、加工され、交易の中継点となるブーゲンヴィル島に売られていくまでのプロセスを記述する。それと同時にこの地域でのムシロガイ交易の 1970 年代から現在までの変遷についても記述する。第 5 章では、2011 年の調査で収集した資料をもとに、ソロモン諸島とラバウルの間の中継地点となるブーゲンヴィル島に拠点を置く仲買人のムシロガイ交易活動の最新事情および、近年起こった大きな変化について記述する。最後に第 6 章ではビスマルク諸島を取り巻く、より広いパプアニューギニア及びソロモン諸島における 19 世紀末から現在までの社会変化の中に、ムシロガイ輸入の歴史的経緯を位置づけ直す。

2 ラバウルにおけるムシロガイ販売事情（2002 ～ 2006 年）

輸入の話に入る前に、本章ではムシロガイがラバウルでどのように取り扱われ、売買されているのかについて記述する。

2.1 ムシロガイ販売の実態

既に述べたとおり、タブの原料はムシロガイ³⁾という直径 1 センチ弱、高さ 8 ミリほどの小さな巻貝である。この貝の頂部にペンチを使って穴を穿ち、籐の紐で数珠状

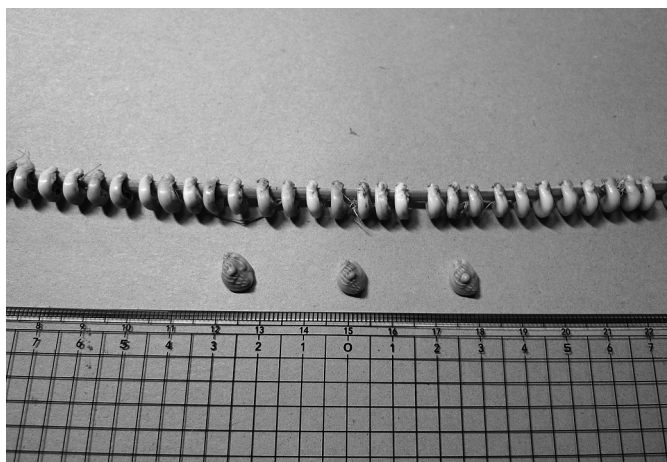


写真 1 貝貨タブとムシロガイ（著者撮影）

につなぎ合わせて、タブは作られる。1 ポコノ *pokono* と呼ばれる 1.8 メートル程度の長さが基本的な単位で、儀礼での分配や商品売買などの際には必要に応じて短くちぎって使われる。短くなったタブは、長くつなぎ直すこともできるが、短くなりすぎたり、あるいは古くなったりして籐の紐が傷んでしまったタブは、いったん紐から貝殻を外してバラバラの状態にしてから再び新しい籐の紐で長くつなぎ直して使われる。つまり、ムシロガイは何度でも使い直せるものである。またタブは、車輪状に束ねられたロロイ *loloi* という形態になると特定の個人の所有物として代替が利かない固有性を帯びることもあるが（深田 2011）、バラバラの貝殻の状態においては基本的にはいくらかでも入れ替え可能な、匿名の貨幣である。破損しない限りは、新しくても古くても同じものとして扱われる。新品のムシロガイに特別な価値があるわけではない。

それゆえトーライの人々は殊更に新しいムシロガイを欲しがることではない。タブが必要ならば村で商品を売ったり、儀礼で分配を受けたりといくらでも別の方法がある。新品のムシロガイには穴を穿つ分だけ余計な手間が掛かることを考えると、そちらの方が効率の良い方法である。とはいえ、商品売ってタブを稼ぐにはある程度の時間が必要であるし、また儀礼で分配を受けるチャンスも都合よくめぐってくるわけではない。儀礼などの準備で緊急にタブが必要になったようなときには、お金次第で手っ取り早くまとまった量のタブを入手することができるという意味で、新品のムシロガイの購入は重要な機会である。

だが日常生活を送る中で、ムシロガイの売買はそれほど頻繁に目にするものではない。売買がなされていないわけではない。ラバウルやイーストニューブリテン州の州都ココボといった主要な町のマーケットでは 1 缶単位で売られているのを目にすることもあるし、また近隣の村の名の通ったビッグマンが売っているという噂を耳にすることもしばしばあった。あるいはソロモンに出張したラバウルのホテルのオーストラリア人オーナーがホニアラで大量に仕入れてきたムシロガイを売っていたこともあったし、またソロモン人の仲買人がココボの商店に来ていて、そこで 1 缶単位で小売りしているという話も耳にしたことがあった。

だが、これらは決して定期的なものでも恒常的なものでもない。2002–06 年のラバウルにおいて、未加工の新しいムシロガイを常に所有し、販売している商店や人物は私の知る限りではなかった。人々が新品のムシロガイを手に入れることができたのは、上記のような機会にたまたま遭遇したときに限られていた。

2.2 ムシロガイ売買に関するトーライ人の態度

このように売買の様子を見かける機会が少なかったこと、あるいは情報が公になっておらずアクセスが難しいという状況には、実際の売買の件数の多少だけではなく、タブおよびムシロガイの売買に対してのトーライの人々の態度が少なからず関わっている。

というのも、トーライの人々はタブを売買するところを、少なくとも積極的に、公にしたがらないのである。実際に、未加工のムシロガイと加工済みのタブは共に現金（法貨）で売買されているし、その事実自体を否定する人はいない⁴⁾。だが、ここで忘れてはならないのは、タブはトーライの人々にとって現金と同じような単なるモノを買うための交換媒体であるわけではなく、それを持つこと自体に重要な価値が込められた特別なモノだということである。それゆえ、タブおよびタブに関わる出来事が、カスタム⁵⁾／ビジネスという分類において金儲けのための「ビジネス」になってしまうことは決して許されない。ここで難しいのは、タブに関して何をしたらビジネスであるとして批判の対象にされるのかが明確に定まっていないことである。たとえば州政府が1999年からはじめたタブの補完貨幣化プロジェクト（深田2006）では、貝貨タブと法貨の互換的な使用を目指しているが、それは日常的にタブを使う機会を増やすことで「トーライの伝統文化を強める」ことであると主張される。だが、この動きに反対する人々からは、それはトーライの伝統を象徴する貝貨を法貨と同じビジネスの論理で扱うことに他ならないと批判される。あるいは葬式などの儀礼会場でのタブを用いて行なう商品売買は、ごくありふれた、通常は何の問題にもならない行為であるが、場合によっては「強欲な金儲け」として非難の対象となることもある（深田2009）。

このような評価基準の曖昧さゆえに、トーライ人のタブの売買に対する姿勢は慎重にならざるをえない。先述したように、一般論としてタブ・ムシロガイの現金での売買はあたりまえに行なわれることで、非難されるいわれはない。だが「自分が今それを売った（買った）」ことを人々は公にはしたがらない。ほんの些細なことから、それは「金のため」「強欲」「ビジネス」と批判されないとも限らないのである。ムシロガイを売る側は、自分がやっていることはビジネスではなく、自分を頼ってきた人々を助けているだけだという姿勢を決して崩さない。また買う側にしても、マーケットでムシロガイを売っている人からその場で買うのではなく、「後日、村まで買いに行くからどこに住んでいるかを教えてくれ」とわざわざ頼む場合もある。自分がタブ・

ムシロガイを売買するところは、他人に見られないに越したことはないのである。

2.3 ムシロガイの輸入元

このように具体的な情報があまり公には語られず、半ば隠されたかたちでムシロガイが売買されており、当のトーライの人々自身もたまたま遭遇するしかない状況において、その具体的な輸入経路の話にたどりつくのは、容易ではなかった。実際、ある特定の人物からムシロガイを買った人々に話を聞いてみても、彼らを買った相手がどこの誰からそのムシロガイを買っているのかについてはよく分からないのが普通であった。彼らから聞けるのは、ソロモン人から買ったんじゃないか、いいやブーゲンヴィル島の仲買人からだ、といった推測で、一般論の域を出るものではなかった。さらに人々にムシロガイを売った当の人物に尋ねても、具体的なムシロガイの採取地や輸入の経路を知することは困難であった。彼らの多くは、ブーゲンヴィル島やソロモン諸島の仲買人から売り込みの電話を受けていた。彼らを買いたいというと、10キロや20キロなどの大きな単位の穀物の袋に入ったムシロガイを持って、仲買人がやってきたという。だが、仲買人がやってくる頻度は一定しておらず、そもそも毎回同じ仲買人が来るわけでもない。その仲買人がどこからムシロガイを持ってくるのかについては、彼らもはっきりとは分かっていない。ソロモン諸島のチョイスルやムンダ、ギソの辺りだという場合もあれば、マライタ島からだという場合もある。

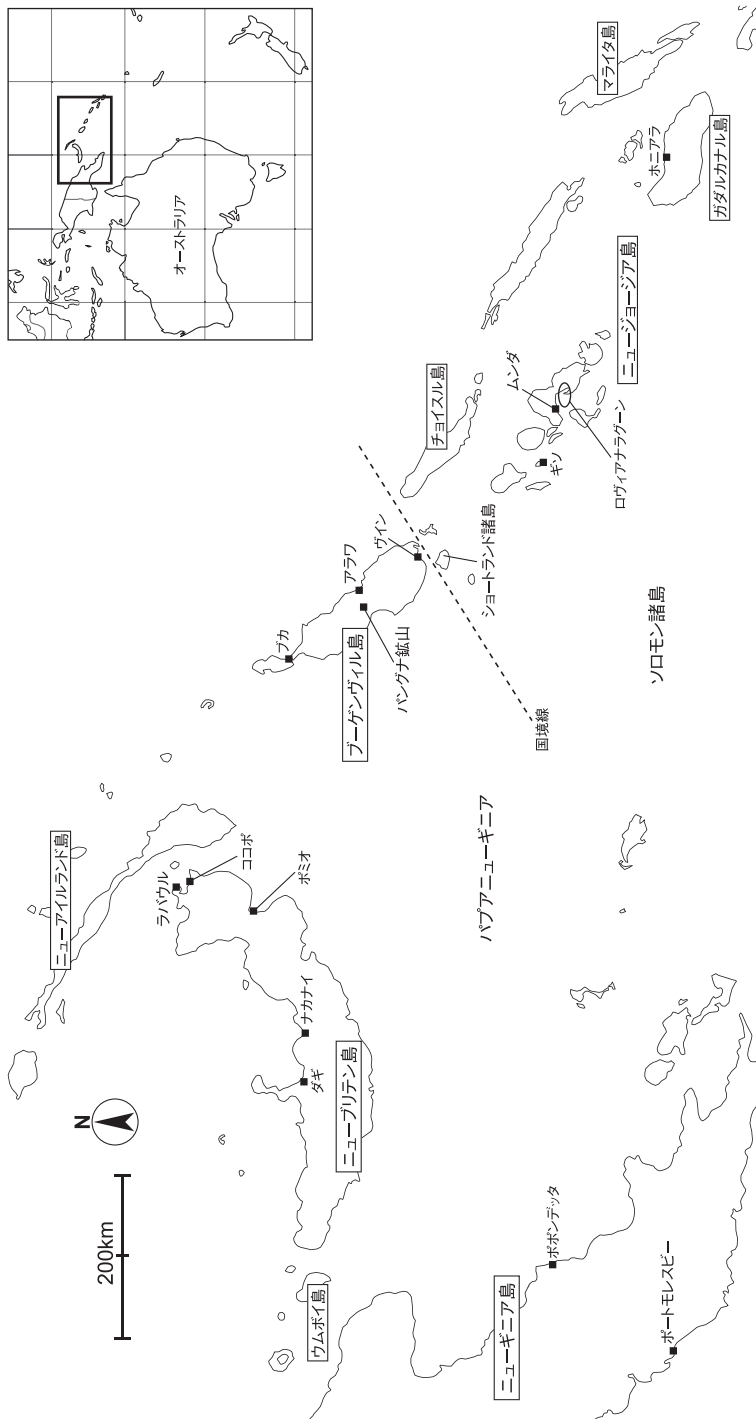
ソロモン諸島から来たムシロガイを大きな単位で入手し、小売りした経験があるビッグマンの中の一人に、私が調査時に住まわせてもらっていた家の家主であるPがいた。当時、私が暮らしていた家には、私が来る以前にはソロモン諸島のチョイスル島出身のSという男性が暮らしていた。Sは教会関係の仕事でラバウルに数年間暮らしていたのだという。PはSが休暇でソロモンに帰省するときに頼んで、ムシロガイを1袋買ってきてもらった。Pはこのムシロガイで自分のためのタブを作っただけでなく、欲しがっている人のために1缶15-20キナで売ったという。このPのように、仲買人経由ではなく友人や親族に頼んで採集地からムシロガイを入手するケースは、決してめずらしい話ではない。たとえば私が遭遇することが出来た数少ないラバウルのマーケットでムシロガイを売っていた中の一人は、ソロモン諸島の男性と結婚した女性であった。彼女は普段はソロモン諸島のウェスタン州にある夫の村で生活していて、親族の葬式に参加するためにクリスマス休暇に合わせてラバウルに帰省してきているところであった。そのついでにムシロガイを1袋(20kg)買って来て、マーケットで売っているということであった。

このように輸入の経路やラバウルでの販売の実態についての情報が不確かで断片的であるという事態は、州政府が貝貨タブやムシロガイの販売や輸入についての管理・規制を行っていないという事実とも関係している。州政府は1999年にタブを法貨を補完する「第二の通貨」として活用していく方針を出して以降、その流通量や品質についてなんらかの管理・規制を行なうべきだという認識を示してはいるが（East New Britain Provincial Administration 2003）、現時点（2012年）では具体的なかたちでは何の規制も管理もなされていない⁶⁾。したがって、ムシロガイを輸入して、それを売ったり、タブに加工したりすることは、誰にでもいくらでも可能である。商品として税関を通して大量に持ち込んだ場合は関税が課される場合もあるが、これも明確なルールが定められているわけではなく、そのときどきで判断は異なる⁷⁾。そして前述のように外部から持ち込まれるムシロガイのうちの少なからぬ量は税関を通らずに、個人的に運び込まれるものである。フェリーや飛行機など公共の交通機関で持ち込まれる場合でも手荷物をいちいちチェックするわけではなく、また沿岸の村に直接ボートで来るケースは関知しようもない。それらが公の場で売りに出されれば、まだ把握しようもあるだろうが、ほとんどの場合は身内や近隣の口伝えで売られるだけである。管理していないからそういう事態が出来しているというよりは、管理のしようがないというのが実際のところであろう。それだけに、どの程度の量のムシロガイが外部から新たに持ち込まれてきており、それがどの程度の量のタブに加工されているのかの全容を把握することはきわめて難しい状況である⁸⁾。

このような状況下で、断片的な情報を自分なりに束ねた2006年当時の私のムシロガイ輸入に関する知識は、「複数の仲買人がブーゲンヴィル島あるいはソロモン諸島からラバウルに来ている。そして、どうやらムシロガイが採れるのはソロモン諸島の西部地域（チョイスル、ムンダ、ギソの辺り）らしい」というものであった。では、この現在のソロモン諸島からのムシロガイの輸入がはじまったのはいつ頃で、それ以前の採集地であるナカナイ地域からの輸入が行なわれなくなったことにはどのような理由があったのだろうか。

3 ムシロガイ輸入の歴史

本章では先行研究を参照しながら、トーライ社会へのムシロガイの輸入について、19世紀後半のヨーロッパ人との接触前後から1970年代にソロモン諸島からの輸入がはじまるまでの歴史を振り返る。



地図1 ニューギニア島東部、ビスマルク諸島およびソロモン諸島 (著者作製)⁹⁾

3.1 接触以前（～ 1870 年代）

トーライ人が暮らすニューブリテン島ガゼル半島にヨーロッパ人が本格的に進出してくるのは 1870 年代からである。トーライの人々は、その頃にはすでにムシロガイ入手のためにニューブリテン島中央部北海岸のナカナイ地域にまで遠征していた（Danks 1888: 305–306）。ナカナイはラバウルから直線距離にして 200 キロ以上離れており、あいだには急峻な山地と異民族の居住地域を挟んでいるため、陸路での移動は不可能である。人々は親族集団や同じ村の男性数人でグループを作り、アウトリガーカヌー¹⁰⁾ に交易品を積んで、海岸沿いにナカナイまで遠征していた¹¹⁾。

ナカナイには決まった交易のパートナーがおり、遠征隊は数週間から数ヶ月程度そのパートナーの保護下で現地に滞在し、持って行った交易品に見合うだけの量のムシロガイが集まると、それを持ってラバウルまで戻ってきたという。ムシロガイと交換するために持っていった交易品には、食料などの他にラバウルの沖合にあるデュークオブヨーク島で作られるペレ *pele* や、ニューアイルランド島から持ち込まれるタブソカ *tapsoka* と呼ばれる貝貨、あるいはレア *rea* と呼ばれる貝殻が含まれていた（Danks 1888: 306; Simet 1991: 85; McPherson 2007: 134–135）。ナカナイやさらに西方のニューブリテン島西部諸地域では、これらの貝貨の他にソロモン諸島のマライタ島で作られた貝貨も使われていたという（Connel 1977: 81–83）。

先述のとおり、メラネシア地域はヨーロッパ人との接触以前から地域と地域、島と島を結んで広い範囲での交易が行なわれていた。ナカナイがニューブリテン島西部、ウムボイ島との交易を介してニューギニア島北東部につながり、またラバウルはニューアイルランド島、ブーゲンヴィル島を介してソロモン諸島までつながっていることを考えれば、トーライ人によるムシロガイ獲得のためのナカナイ遠征は、ラバウルとナカナイの間だけで閉じた交易ではなく、メラネシア一帯に広がる貝殻貨幣などを中心とした、伝統的な交易ネットワークの一部として存在していたと考えることができるだろう。

3.2 ヨーロッパ人との接触（1870 年代～ 20 世紀初頭）

1870 年代からのヨーロッパ人との接触以降、ナカナイへのムシロガイ獲得のための遠征は下火になるところか、より頻繁により大規模になった¹²⁾（Salisbury 1970: 28）。その理由としては二つのことが考えられる。一つはヨーロッパ人がもたらした帆船による海上移動技術の革新である。それまでのアウトリガーカヌーから板張りの

帆船へと移動手段が変わることで、ナカナイまでの移動が大幅に容易に、そして大規模になった。1895年には中国人の船大工がラバウルのすぐ近くのマチュビット島に船建造のためのドックを構えるようになり、トーライ人は彼から帆船を購入して、ナカナイに行くようになったという (Salisbury 1970: 242, 285)。

もう一つの考えられる理由は、ヨーロッパ人との交易が盛んになったことに起因するタブ需要の増加である。20世紀に入る頃には、トーライ人の居住地であるガゼル半島はドイツ領ニューギニアの植民地経営における中心地になっており¹³⁾、ガゼル半島のコブラのプランテーションにはニューブリテン島外から連れてこられた多くの契約労働者が働いていた¹⁴⁾。トーライの人々は自らコブラを生産する他に、これらのプランテーション労働者の食料となる野菜などを栽培し、ヨーロッパ人に売って利益を上げていたが、これらの代金はマルクだけではなくタブでも支払われていた。接触当初、トーライ人はヨーロッパの金属製の道具¹⁵⁾を欲しがり、それらとココナツや野菜を交換していたが、19世紀末には特にヨーロッパ人との接触が頻繁であった沿岸地域ではこれらの商品はすでに十分に行き渡っていたため、ヨーロッパ人商人にタブでの代金の支払いを要求するようになったのだという¹⁶⁾ (Salisbury 1970: 285)。1880年代の接触当初にタブ1ポコノ＝2マルクだったのが、1899年に1ポコノ＝4マルクになったことから分かるように、この期間にタブの価値は明らかに上がっている (Salisbury 1970: 185–186)。タブがマルクによって一方的に買われる商品であったわけではなく、マルクと並行して用いられる通貨であったことは、植民地行政府が1900年8月と1901年7月に、トーライ人とヨーロッパ人の間の交易でのタブの使用禁止を布告した (Salisbury 1970: 185–186) ことから明らかである。わざわざこうして禁止しなければならないほど、タブは頻繁に支払いに用いられていた。たとえば、先述したマチュビット島の造船ドックで中国人船大工が建造した船を購入するときにも、支払いはタブで行なわれたという (Salisbury 1970: 286; Neumann 1992: 184)。以上のことから、ヨーロッパ人との接触以降、盛んな交易の結果としてタブはその価値を上げ、需要を増したことがわかるだろう。その結果として不足したタブを手に入れるために、トーライの人々は新しい移動技術を使ってナカナイへ向かったわけである。

3.3 交易の中心地ラバウル (20世紀前半～太平洋戦争)

19世紀末から20世紀半ばにかけて、ムシロガイ獲得のためのナカナイへの遠征はトーライ人にとってのみならず、ナカナイの人々にとっても重要な意味を持つもので

あった。そしてその意味は、トーライ人とヨーロッパ人との接触の以前と以後で少なからず変わったものと考えられる。この変化を端的に言えば、接触以前はムシロガイに限らずその他の貝貨や食料、工芸品などを広くやり取りする対称的な交易であったものが、接触後にはトーライ人によるムシロガイの買い付けという非対称的な取引の色合いが強くなったということである。これは同時に、はっきりとした中心をもたずに広がっていた交易ネットワークの中に、植民地都市として経済的に力をつけたラバウルが、周囲から人やモノ、情報を集める明らかな中心として登場してきたということでもある。その中心にいるトーライ人と周縁にいるナカナイ人の経済的な非対称性は明らかである。たとえば、少なくとも 20 世紀の半ばに至るまでナカナイの人々にとっての唯一の現金収入源がトーライ人とのムシロガイ取引であったこと¹⁷⁾、あるいは 19 世紀末にトーライ人がナカナイ人を奴隷としてラバウルに連れて来ていたこと (Neumann 1992: 186)¹⁸⁾ などがそのことを示している¹⁹⁾。またトーライ人がムシロガイを多種多様なモノの交換の中で獲得するのではなく貨幣で買うようになったということは、先述したレアというニューアイルランドで採れる貝が次第にラバウルから供給されなくなり、特に太平洋戦争後には完全になくなった²⁰⁾ (McPherson 2007: 135) ことから読み取れる。

このレアという貝を原料とする貝貨が、ニューブリテン島西部で広く使われることから分かるように、ナカナイはコヴェ Kove やバリアイ Bariai, カリアイ Kaliai などニューブリテン島西部の諸地域と交易関係にあり、ラバウルに入ってくるムシロガイも少なくともその一部は、これらニューブリテン島西部の他地域で採集されたものであるという (McPherson 2007: 133–135)。以上のことから、20 世紀前半、ナカナイの人々およびそこから交易を通してつながっているニューブリテン島西部の諸地域にとって、ムシロガイ交易をとおしてのラバウルとの非対称的なつながりが、貨幣や金属製品などに代表されるヨーロッパ世界との重要な接点であったことが分かる²¹⁾。

3.4 太平洋戦争終了から独立国家へ (1942 年～1970 年代)

1942–45 年の太平洋戦争中、日本軍の司令部が置かれたラバウルは連合軍の激しい爆撃に曝された。この状況下でナカナイへの遠征は一時途絶えたが、しかし戦争終結後には以前にも増して多くのトーライ人がナカナイへ向かうようになったという。これは戦火で大量に破壊されてしまったタブを埋め合わせるためであり (McPherson 2007: 135)、また復興が進まないうちはラバウルにも十分な働き口がなかったからという事情もあったようである (Salisbury 1970: 284)。この時期、ナカナイに遠征に行

くことは、トーライの若者にとって一人前の大人になるための通過儀礼的な意味を持っていたという記述も見られる (McPherson 2007: 136)。少なくともこの戦後の一時期、ナカナイへの遠征はそれだけ人々にとって身近なものであったということである。あまりに多くの人がナカナイに向かったために、現地での供給が需要に追いつかず、缶1杯分のムシロガイの価格が5 シリングから 10 シリングへと戦前の2 倍まで上がったという記録もある (Salisbury 1970; McPherson 2007: 135–136)。

このようにナカナイへのムシロガイ獲得の遠征は、ヨーロッパ人との接触以前から 20 世紀前半の二度の大戦を挟んで少なくとも 1960 年代まで、いろいろとカタチを変えながらも——交換財は食料や貝貨から現金やヨーロッパ製の金属製品に、交通手段はアウトリガーカヌーから帆船、さらにフェリーや飛行機に、行動単位は集団から個人に、男性だけだったのが女性も行くようになった (Simet 1991: 88–89) ——続けられた。

だが 1960 年代半ば頃から、ムシロガイ供給におけるナカナイの重要性は下がりはじめたようである²²⁾。これには同海岸で採れるムシロガイの量が減りはじめたという事情もあったようだが、同時に他の地域でもムシロガイが発見されたこと、そしてトーライの人々がそれらの新しい産地へ遠征のような手のかかるカタチではなくアクセスできるようになったことが大きな意味をもつ。背景には 1960 年代からパプアニューギニアの独立へ向けて、パプアニューギニア人自身が教師や役人、軍人などさまざまな職業で国内の各地で職に就く機会が増したこと、また経済的な自立に向けて各地で開発された大規模プランテーションや鉱山での就業機会を求めて、多くの人が移動するようになったことがある。ヨーロッパとの接触の歴史がパプアニューギニアの中でもっとも長く、相対的に教育程度が高いトーライの人々の多くも、職を求めて各地に移住するようになり、その結果としてナカナイ以外のさまざまな場所でもムシロガイが「発見」されることになった。たとえばアブラヤシの大規模なプランテーションが開発されたニューブリテン島西部のホスキンスやダギ、材木伐採が進められたニューブリテン島南海岸の西ポミオ地域、銅鉱山の開発が進められたブーゲンヴィル島、さらにブーゲンヴィル島から国境を越えてすぐのソロモン諸島西部地域などでもムシロガイが発見され、新たな供給源となったのである (Simet 1991: 87–89)。

これらの新しい産地からのムシロガイの輸入は、現地に移住した、あるいは仕事で一時的に滞在したトーライ人が買い付けて帰省する際に持ち帰る、あるいは親族や友人のネットワークを使って運ぶというのが一般的な方法であった (Simet 1991: 88–90)。移住した人が現地で買うにせよ、あるいは昔どおりのナカナイへの遠征にせよ、

親族のつながりを経由して持ち帰ってくるのは、前章でも見たように今日に至るまでもっとも一般的なムシロガイの輸入方法のひとつである。だが、それ以外のやり方も1980年代以降は多くなっている。

そのひとつが、トーライ人がムシロガイの産地まで行くのではなく、各産地の人々がムシロガイを持ってラバウルまで売りに来るというやり方である²³⁾。ナカナイでは1950年代から一部の人がラバウルまでムシロガイを売りにきていたというが(Salisbury 1970: 282)、1980年代以降ダギや西ポミオなどの他の産地に関しても急速に増えてきたという。

もうひとつは、ムシロガイの買い付け・輸入・販売をビジネスとして行なう仲買人によるものである。たとえばニューブリテン島西部のダギでは、トーライ人女性を妻にもつオーストラリア人男性が、自らが経営する材木会社が伐採を行なっている地域でムシロガイを買い付け、それをラバウルに持ち込んで売っていたという。また西ポミオ地域では、ラバウルでビジネスをしている中国人がムシロガイを買い付け、ラバウルで売っていたという。この仲買人ルートでのムシロガイは1970年代後半にラバウルの町でかなりの量が出回っていたようである(Simet 1991: 91-96)。

しかしこれらの仲買人の手によるムシロガイの輸入・販売は、しばしばその販売価格が高すぎるとしてトーライ人の批難を浴びた。1980年にイーストニューブリテン州政府はこれらの批難の声に応え、中国人ビジネスマンがムシロガイを買い付けていた西ポミオの地域政府と協定を結んだ。その結果、ポミオのムシロガイが高値で売られていることへの対策として、西ポミオ地域政府が地元の住民からムシロガイを集め、それをラバウルに運んでイーストニューブリテン州政府がトーライ人に売るということが行なわれた²⁴⁾。このようなトーライ人による反発や政府による介入から、非トーライ人の仲買人の多くはムシロガイの輸入・販売を断念したという(Simet 1991: 91-96)。

こうした仲買人の排除の動きも一部にはありながら、しかし1970-80年代以降、ムシロガイの輸入の方法やそこに関わる人は以前に比べて多様になり、またその採集地も増えたということが言える。その時期から今日まで続く、ソロモン諸島からのムシロガイの輸入は以上のような歴史的な経緯を受けてのものである。

次章以降では、私自身のフィールドワークをもとに、ソロモン諸島からのムシロガイの輸入の現在の状況、およびそれがはじめられたきっかけと現在に至るまで20-30年の歴史的経緯を見ていきたい。

4 ソロモン諸島ロヴィアナラグーンからのムシロガイ輸入 (2009 年)

本章では、現在の主要なムシロガイ採集地であるソロモン諸島ウェスタン州のロヴィアナラグーンにおいて 2009 年に実施したフィールドワークの成果に基づいて、ムシロガイが採集・加工され、仲買人の手を経て、パプアニューギニアのブーゲンヴィル島に売られていくまでのプロセスを記述する²⁵⁾。1, 2 節では 2009 年調査時の最新の状況を紹介し、3 節ではロヴィアナラグーンでムシロガイの採集がはじまった 1970 年代から現在に至るまでの歴史的経緯を記述する。

4.1 ムシロガイを採る／加工する人々

ムシロガイが採集されるのは、ソロモン諸島ウェスタン州のニュージョージア島の南岸に位置するロヴィアナラグーンと呼ばれる海域である。この海域のカレナベイと呼ばれる静かな入江の水深 1-1.5 メートルほどの砂地の海底にムシロガイは生息している。ムシロガイはこの地域のローカル言語であるロヴィアナ語では、バンガポンドゥ *Banga Podu* と呼ばれる。付近の他の海域にも多少は生息しているらしいが、サイズや色、採れる量などの条件から、この地域で採集が行なわれているのは、このカレナベイだけであるという²⁶⁾。ロヴィアナラグーンではこれを採集して食用にすることはなく、また装飾品として使うこともない。したがってかつてはまったく見向きもされない貝であったし、現在ももっぱら買い付けにくる仲買人に売るための商品としてのみ採集している。

私が調査時に滞在した O 村は、空港があるムンダの町から船外機を付けたボート²⁷⁾ (以下、船外機付ボートと呼ぶ) に乗って、海岸沿いに 1 時間ほど行ったところにある村である。この O 村からムシロガイを採集するカレナベイまでは、船外機付ボートで 30 分ほど、手漕ぎのカヌーで行くと 2 時間ほどかかる。この距離をいちいち行って戻ってくるのは面倒、かつ燃料費もかかるということで、O 村の人々は一度カレナベイに行くと海沿いにある大きな洞窟などに寝泊まりして 1-2 週間滞在し、ムシロガイ採りを続ける。寝泊まりする洞窟は大きなもので、他の村からムシロガイ採りに来た人々も一緒に寝泊まりしている。

ムシロガイは浅い海底の砂地に生息しているので、ゴーグルを装着して水中に潜り、砂地の上にいる、あるいは表面の砂を手で払って砂の中に隠れているのを採し当



写真2 カレナベイでムシロガイ採りをする女性（著者撮影）

て、採集する。採集は、朝の8時頃から夕方4時頃まで一日中おこなう²⁸⁾。ムシロガイ採集はこのあたりの村では数少ない貴重な現金収入源（Aswani 2000; Furusawa and Ohtsuka 2006）ということもあり、男女を問わず皆海に潜り、子供でも6-7歳くらいになれば親と一緒にカレナベイまでついてきて潜りをおぼえるようになるという。子供もするというと楽な仕事に思われるかもしれないが、身体的には決して楽な仕事ではない。一日中海の中にいるので体が冷え、それが原因で腰や背中を痛めてしまうこともあれば、耳の中に水が入って抜けなくなってしまうこともある。若くして身体を悪くして、もう自分ではムシロガイを採ることが出来なくなってしまう人もいれば、中には潜り過ぎて身体を壊して死んだ人もいるという。

カレナベイのごく近くに位置するある村に住む老人は、このあたりでのムシロガイ採集のはじまりについて、そして村においてムシロガイ採集がどのようなものであるのかについて、次のように話してくれた。

最初にムシロガイを採りはじめたのはソロモン諸島の首都、ホニアラから来た夫妻だった。夫がホニアラの人で妻がこのあたりの出身。たまたまムシロガイを持ってホニアラに行ったら、トーライ人がその貝を欲しがっていることを知り、次にロヴィアナラグーンに戻ってきたときに潜ってムシロガイを採りはじめた。ムシロガイがラバウルで高い価値を持っていて売れる貝であることを夫妻から聞くと、村人は夢中になって海に潜りはじめた。それまではみんな畑で働いて食べるだけの、お金がない自給自足の生活だったが、ムシロガイが売れると分かってからは、みんな畑を捨てて、潜っては採り潜っては採りの生活をはじめた。畑で食料を栽培する生活から、ムシロガイを売った金で食料を買う生活に変わったのだ。おかげで多くの畑は今ではブッシュになってしまった。中には潜り過ぎて死んだ

人もいる。彼は水中で缶（採ったムシロガイを入れるための）を握り締めたまま死んでいた。浮かんでこないのかおかしかったら、海底で死んでいた。左手は強く缶を握り締めたまま離さなかった。ドライバーを使ってようやく缶を手から引き剥がした。

この老人の話からは、それまでまったく見向きもされてこなかったムシロガイが遠くラバウル²⁹⁾でトーライ人に売れる商品であると分かったことで、人々の生活が、畑で働く自給自足からムシロガイを採集して現金を獲得するというかたちになり、そしてそのムシロガイ採集に熱中していったということを読み取ることができる³⁰⁾。

人々はカレナベイで潜り、ムシロガイを採集すると、それを穀物袋に入れる。村に持ち帰って来られたムシロガイは、その状態のまま数日間放置される。するとそこに蠅が卵を産み付け、蛆虫が貝殻の中で腐ったムシロガイの身を食べる。その時期を見計らって、ムシロガイを海水でよく洗って蛆虫や残った汚れを落とし、ビニールシートの上に広げて天日干しする。すると貝殻の中にもぐりこんでいた蛆虫も熱さに耐えかねて這い出てきて死ぬ。それを再び海水で洗って天日に干して、商品としてのムシロガイが完成する。

ムシロガイの計量は基本的に330 mlの魚の缶詰の空き缶で行なう。この計量の方法はラバウルでも同じである。ラバウルでは1缶＝5ポコノ分のタブであるとされるので、1ポコノに含まれる貝殻がだいたい320-400個であると考ええると、1缶にはムシロガイ1,600-2,000個程度が入ると推測される（が、それを個数で数えることはない）。1日で採集できる量はそれぞれの上手い下手によるが、だいたい2-5缶程度だ



写真3 ムシロガイを天日に干す（著者撮影）

というので³¹⁾、仮に一度カレナバイに行って2週間滞在してムシロガイ採集を行なうとすると、行き帰りのボート代としてカレーパウダーの容器2本分（後述）を支払ったとしても、25-40 缶程度のムシロガイを獲得できる計算になる³²⁾。

村ではたいていどこの家でも乾燥済みのムシロガイを穀物袋に入れて家の中にしまっていて、私が話を聞きに行くとき出てきて見せてくれた。他の現金収入源に乏しいO村では、日常的な商品売買の際にソロモンドルだけではなくムシロガイも用いられている。村にはムシロガイをソロモンドルで買い取っている商店があり、そこに持っていけば1缶分のムシロガイを20ソロモンドルで買い取ってくれる（2009年の12月時点）。またムシロガイをソロモンドルの現金に換えるだけではなく、ムシロガイで直接商品の代金を支払うこともできる。この場合も1缶分のムシロガイで20ソロモンドル分の買い物をする事ができる。また計量には缶だけでなく、より小さな単位として細長いカレーパウダーの容器も用いられる。カレーパウダーの容器1杯分のムシロガイで、6ソロモンドル分の買い物をする事ができる。このカレーパウダーの容器の高さは6インチで、1インチ毎に油性マジックで目盛りが刻まれており、1インチ分のムシロガイを1ソロモンドル分の支払いとして店は受け取っていた。

以上のことから、このO村の人たちにとってムシロガイは重要な現金収入源であり、また彼らはムシロガイをソロモンドルの代用品としても使っていると言えるだろう。このことは、ある村人が次のように言っていたことからよく分かる。

何か必要になったら、ムシロガイを持って売店に行って買い物をすればいい。1缶で20ソロモンドル分の好きなものを何でも買える。1日にムシロガイを4-5缶分採集できれば1日80-100ソロモンドルの高給取りだ。お金が必要になったら銀行に引き落としに行くのと同じようにわれわれは海に行く。海の中に金があるわけだから。「何？米と砂糖と紅茶が必要？授業料の支払い？よし、じゃあ、お金を取ってくる」という具合に海に行くのだ。

4.2 ムシロガイを売る／買う人々

とはいえ、ロヴィアナラグーンの村落でムシロガイが貨幣としての役割を果たしているのは、あくまでもそれがソロモンドルに交換してもらえる保証・見込みがあつてのことである。彼らはトーライ人とは異なり、ムシロガイそれ自体を欲しがっているわけではない。それはあくまでも貨幣の代理に過ぎず、ソロモンドルで売れなければ意味がない。したがって、それが誰に、どの程度の頻度で、いくらで売れるのかは、とりわけ地理的に町から離れたロヴィアナラグーンに住む人々にとっては極めて重要な問題である。

O村にムシロガイの買い付けの仲買人が来るのは不定期である。クリスマスから1月にかけてはよく来る季節で、2, 3, 4月は少ないという。時期については人によって言うことは違うが、いずれにせよ、人々は基本的にいつ来るか分からない仲買人を待つしかない。仲買人はもっとも近くの町であるムンダやウェスタン州の州都ギソから、あるいは国境を越えてパプアニューギニアのブーゲンヴィル島からもやってくる。国境を越えてくる場合でも、仲買人たちは出入国の手続きはとらずに来てることが多い。仲買人は船外機付ボートでロヴィアナラグーンの村々を巡回し、人々から缶1杯単位でムシロガイを買い取っていく。ボートは、25 kgの穀物袋に詰めたムシロガイを15袋も積むと積載量いっぱいになってしまう。また場合によっては単に仲買人の手持ちの現金が足りないということで買い取ってもらえないこともある。仲買人は現金で買い取りを行なうだけでなく、服やテレビ、ジェネレーターや船外機などの商品を積んできて、それとムシロガイと交換することもあるという。ムシロガイの買い取りの価格はそのときどきで異なるが、2009年末の時点では1缶で20-25 ソロモンドルが相場であった。

ロヴィアナラグーンの村人からすれば、仲買人がいつ買いに来るのが分からないのは困りものである。いくらムシロガイをもっている、それはソロモンドルに交換出来なければ意味はない。前述したように、O村にはムシロガイを買い取っている商店がひとつあり、現金がなくなった際には、村人はそこでムシロガイによる支払いで買い物をすることもできる。だが、その場合の買い取りの価格は仲買人に直接売るよりは若干安くなる。

この商店の主人であるBは、カレナベイにムシロガイを採集に行く人々のためにしばしば船外機付ボートを出しており、またその際にカレナベイの近隣の村に立ち寄ってムシロガイを買い集めてくることもある。だが、彼自身はそこまで大きな資金力はないため、買い取れる量は限られている。在庫がたまりすぎると村人からの買い取りは停止する。また彼はブーゲンヴィルやラバウルといった遠方まで自らムシロガイを売りに行くことはない。一度ブーゲンヴィルまで行ったことはあるが、かかる時間とコスト、そして負わなければならないリスクが大きすぎるのでやめたのだという。基本的にはブーゲンヴィルやムンダから村にまで買い付けにやって来る仲買人に売ることが多いが、長期間村に仲買人が来ないときには、自らボートを出して1時間ほどかけてムンダの仲買人に売りに行くこともある。いわばBは、O村周辺のローカルレベルにおけるムシロガイの取りまとめ役であると言えるだろう。

私がO村での滞在を終えてムンダの町に引き上げるときには、このBがボートを

出してくれたのだが、彼はこのとき3袋のムシロガイを船に積んでムンダの仲買人Lのところに売りに行った。2009年12月当時、ロヴィアナラグーンの村々からもっともたくさんのムシロガイを買っていた仲買人の一人がこのLであった。L自身はウェスタン州の他の地域出身だが、彼の妻がロヴィアナラグーンのS村の出身であるという。Lは2009年1月に、そのS村にムシロガイを買い取るための小屋を作り、本格的に仲買人のビジネスをはじめた。買い取りの価格は最低で20ソロモンドル、最高で25ソロモンドル。直近では23ソロモンドルで買い取ったという。S村で買うだけでなく、ムンダのオフィスに持ち込まれたムシロガイを買うこともあるし、ときにはボートでロヴィアナラグーンの村々をまわって買い付けることもある。

Lは、買い付けたムシロガイを25kgの穀物袋に詰め直し、ブーゲンヴィルから来る仲買人に売る。現在、彼がムシロガイを売っている主な相手は「ネルソン」というブーゲンヴィル島に住む仲買人で、ムシロガイがある程度集まってから彼の携帯電話に連絡をすると、2-4週間後にボートでやってくるのだという。前回ネルソンが来たときには、1缶分のムシロガイを30ソロモンドルで売った。これまでネルソンには通算で、25kg袋で60袋分くらいのムシロガイを売っている。ロヴィアナラグーンでのムシロガイの買い付けの価格は、このネルソンに売るときの価格、および残っている在庫の量によって変わってくるという。私がインタビューをしたときは、ネルソンがしばらく来ていなかったため在庫が大分たまっていた。そのため、BがO村からわざわざ運んできた3袋のムシロガイは買い取ってもらえずに、そのままO村に持ち帰られた。

Lは、自分がムシロガイの仲買人をやっている理由を次のように語る。

ムシロガイの仲買は、決して自分が金儲けをするためではなく、むしろロヴィアナラグーンの人々の生活を助けるためにやっていることだ。ロヴィアナラグーンからの買い取りの量を増やし、いずれは独占して、販売ルートを一元化することで、供給量や価格をコントロールすることが可能になる。現在はロヴィアナラグーンの人々はいつ仲買人が来るのか、いくらで売れるのかが分からないため不便な思いをしているが、価格や買い付けの頻度を安定させ、人々の生活を助けるのだ。いまはムンダやギソ、ノロ、ブーゲンヴィルの各地にたくさんの小規模なミドルマン³³⁾が点在しており、てんでバラバラに商売を行なっているため、価格にしても買い付けの量にしても、不安定な要素が多すぎる。ロヴィアナラグーンの人々の生活のためには、できるだけミドルマンを排した、良い取引のルートを作っていかなければならない。自分は今25ソロモンドルで買い付けて、30ソロモンドルで売っているが、いろいろなコストやリスクを考えると決して利益は大きくない。これは人助けなのだ。今はそのためのルートとシステムを作っているところなのだ。ところで、お前はラバウルから来たと言っていたが、ラバウルの政府関係者に知り合いはいないか？誰か連絡

先を知っていたら教えてくれないか。直接ラバウルに売るルートを作ることができれば、ロヴィアナラグーンの村人にとっても私にとっても、そしてラバウルの人たちにとってもハッピーなビジネスをすることができると思うんだが。

ここでLが言っているコストやリスクは具体的には、小さな船外機付ボートで長距離を移動するという輸送に伴う危険や不安定さ、高い燃料費、国境を越えているのに税関を通していないことの法的リスク、そして遠方の取引相手と安定した関係を築くのが困難であり、いつやってくるのか、支払いが確実になされるかどうか分からないなどの要素である。Lが私に、ラバウルの政府関係者を教えてくれと言ってきたのも、単にブーゲンヴィル島のミドルマンによる中間コストを減らして、より儲けを大きくしたいだけではなく、リスクの少ない安定的な取引のルートを作り出したいということだと言えよう。

実際、これらのリスクは軽視できるものではない。私はムンダの町で、L以外にもう一人、ムシロガイの仲買をやった経験があるという人物に話を聞かせてもらったのだが、彼はその年のはじめに2回ほどこのビジネスを試してみた上で、上記のようなリスクが大きすぎるために手を引いたという。もし安定した取引のルートを築ければ確実な収入を得ることができるビジネスだが、少なくとも現状では良いビジネスではないと彼は言った。

4.3 ブーゲンヴィル島へのムシロガイ輸出の歴史

上述のように、ムシロガイ輸出に伴う大きな困難のひとつは、採集地であるソロモン諸島ウェスタン州から、消費地であるパプアニューギニア、ラバウルまでの物理的な距離にある。国境を越え、はるばる海を渡って800 kmも離れた場所まで貝殻を運ぶのは、船の定期便などが無いこの地域において決して簡単なことではない。

なぜそんなに遠くからコストをかけて、大きなリスクを背負ってまでムシロガイを運ぶのか？それはもちろん、現時点でムシロガイが他ではなかなか入手できない希少な財だからであり、それだけコストをかけても、ムシロガイをラバウルに持っていくことさえできれば商売として十分成立するからである。

だが、もう一つ、より根本的な疑問が残っている。それは、ラバウルで求められる特定のサイズと色を備えた、他ではなかなか見つからないムシロガイが、なぜ直接的な交流がなかった、遠く離れたソロモン諸島で「発見」されたのかということだ。前述したように、ロヴィアナラグーンの村々ではムシロガイはそもそも採集されることもない、ただ海底の砂の中にひっそりと暮らしているだけの貝であった。すなわち、

この貝は誰かに発見されなければ、そのまま日の目を見ることはなかったのである。では誰が、いつ発見したのか。

それはおそらくはトーライ人である。たとえムシロガイに価値があると話を聞いても、ラバウルで価値を認められるムシロガイの色やサイズの判断はトーライ人以外には難しい。では、なぜトーライ人がラバウルから遠く離れたソロモン諸島にいたのか？そこに関係してくるのがブーゲンヴィル島での鉱山開発である。このことはすでに第3章で簡単に触れたが、以下ではムシロガイがロヴィアナラグーンで発見され、輸入されるに至った経緯についてももう少し詳しく見てみたい。

ここで話はもう一度ロヴィアナラグーンのO村でムシロガイの買い取りをしていたBの商店に戻る。この商店がムシロガイに関わるビジネスをはじめたのは、現在の経営者であるBの父、Kの代からである。Kは、おそらくこのロヴィアナラグーンでのムシロガイ採集・販売の最初期に関わっていた人物の一人であり、彼の話からはO村のムシロガイがどのように発見され、商品として売られるようになったのかの歴史的な経緯を見ることが出来る。以下は2009年12月16日にKから聞いた話をまとめたものである。

Kがムシロガイの売買をはじめたのは1974年のことだった。彼はその年、ショートランド諸島を経由してブーゲンヴィル島の南部の町ヴィンを訪れた。Kはそこでパングナ鉱山に働きに来ていたトーライ人に会い、彼らがムシロガイを欲しがっているという話を聞いた。そして、Kはその年からカレナベイで採集したムシロガイをヴィンに運んでトーライ人に売るというビジネスをはじめた。ムンダからショートランド島まで飛行機で飛び、そこからブーゲンヴィルまではボートでたった20分だ。

当時、ムシロガイ1缶は12キナ程度で売れた。1980年になるとブーゲンヴィルのパングナ鉱山が開業した(Kはこう言っているが、実際にパングナ鉱山での採掘がはじめられたのは1967年のことである(塩田1991))。ムンダーアラワ(パングナ鉱山)間を飛行機の定期便が飛ぶようになり、Kはこの便を使って、1年に20回も30回も往復してムシロガイを売りにブーゲンヴィルに行った。当時は一回一回パプアニューギニア入国のためのビザをもらうのが面倒なので、ビジネス用のマルチエントリーのビザをもらっていた。1983-84年頃には彼が知る限りで13人のムシロガイの仲買人が、アラワとロヴィアナラグーンのあいだを行き来していたという。

仲買人たちは皆、このO村でムシロガイを買って、ブーゲンヴィルに運んでいった。O村の現金収入源はムシロガイ以外には何もなかった。学校の授業料も、このあたりに建っている家も、すべてのものをムシロガイで稼いだ金でまかなってきた。

だが、1989年ブーゲンヴィルで独立闘争が始まり、ムンダーアラワ(パングナ鉱山)の定期便が飛ぶなくなる。治安状態悪化のため、ブーゲンヴィル島に入るのは実質的に不可能になり、Kは自分の手でムシロガイを運んでいくのはやめることにした。それ以降は基本的には仲買人が買いに来るのを待つだけになった。

1989年にはホニアラのニューギニア航空で働いているJという男（彼の妻がムンダ出身）から問い合わせがあって、ムシロガイを売ったことがある。最初は20袋、2回目に6袋を貨物船でホニアラに送った。おそらく飛行機でラバウルに運んだのだろう。しかし取引はこの2回だけだった。飛行機で運んでやるとしたら割に合わないビジネスなのだろう³⁴⁾。1997-2000年にはNという仲買人とよく取引をした。彼はチョイスル島出身で、現在はギソでモートルの経営をしているビジネスマンだ。そのころは彼に良く売った。彼は今では体を壊して引退している。

ソロモン諸島のウェスタン州でムシロガイが採れることが発見されたのは、1965-70年くらいの時期であると言われている（Simet 1991: 80）。きっかけはKの話にも上がっているとおり、ブーゲンヴィル島のパングナ鉱山である。1967年から採掘がはじまったこの鉱山は、1975年の独立以降、輸出総額の45%を稼ぎ出すパプアニューギニア経済の屋台骨となり、パプアニューギニア各地から労働者を集めた。先述したとおりコロニアルエリートとして教育程度が高かったトーライ人も、この鉱山での高給を目当てにブーゲンヴィル島に多く働きに来た。このときに同島南部のヴィンの付近でムシロガイが発見され、さらに国境を挟んでいるとはいえ、日常的に頻繁に行き来がなされるソロモン諸島のウェスタン州でもムシロガイが発見されたものと考えられている（Simet 1991: 80-85）。

Kの話によればロヴィアナラグーンからのムシロガイの輸出が本格的にはじまったのは1974年頃で、80年代中頃にかけてそれは全盛期を迎えたようである。当時、ムンダからアラワを定期的に結んでいた飛行機を利用して、多くの仲買人がロヴィアナラグーンのムシロガイをアラワに運んでいたという。運んだのがアラワまでで、そこからラバウルまで直接運んだという話を聞かないのは、当時はアラワに多くのトーライ人が滞在していたからである。ブーゲンヴィル島からラバウルまでは、それを買ったトーライ人が帰省などの際に持ち帰ったのであろう。これについては第2章で見たとおりである。

13人もの仲買人がいたという1980年代の状況は、明らかに私が2009年にムンダでLに聞いた現在の状況とは異なっている。ある程度のコストはかかったであろうが、しかし飛行機の定期便という確実な運搬の手段があり、またアラワに行けば鉱山で働いているトーライ人という確実にムシロガイを買ってくれる金回りの良い取引相手がいる。現在に比べて圧倒的に安定した交易ルートが1980年代にはあったということである。このような採れば採っただけ売れる状況下で、ロヴィアナラグーンの人々は夢中になって海に潜ってムシロガイを採集し、売った。そして仲買人はマルチエントリーのビザを取得して、年に20-30回も国境を越えてムシロガイを売りに行っ

た。

だが、その状況は 1989 年にはじまったブーゲンヴィル島の独立闘争によって一変する。パングナ鉱山の利益配分についての不満や鉱山開発による住環境の悪化などから火が付いた「ブーゲンヴィルクライシス」と呼ばれるこの独立闘争によって、島内の治安は極めて悪い状態に陥った。島外出身者に対する無差別な暴力事件もたびたび生じたため、鉱山に出稼ぎに来ていた島外出身者はもちろん、もともとブーゲンヴィル島に暮らしていた人々の多くも島を出て避難生活を送らざるを得なかった（塩田 1991）。このような状況において、ロヴィアナラグーンからブーゲンヴィル島を経由してラバウルにムシロガイを運ぶ手段はほとんど途絶えたようである。ときおり仲買人が来ることはあったらしいが、その回数もずいぶん減った。また船や飛行機を使ってソロモン諸島の首都であるホニアラを経由して、ラバウルに至るルートも試されたようだが、経費がかかりすぎるためそれほど頻繁には行なわれなかったようである。

いずれにしても、このブーゲンヴィルクライシス以降、ロヴィアナラグーンの人々が自分たちの手でムシロガイを遠方まで運んでいくことはほとんどなくなった。これ以降は基本的に外部からの仲買人が買い取りに来るのを待つというやり方が、ロヴィアナラグーンの人々がムシロガイを売るための主な方法になった。そしてその量や頻度も 1980 年代に比べて、はるかに少なくなった。とはいえ、それは完全には無くなったわけではない。ムシロガイの採集がロヴィアナラグーンの村々の重要な現金収入源である状況は今日まで変わっておらず、また前述したようにラバウルでもムシロガイを定期的でないにせよ買うことができたということは、不安定であるにせよムシロガイ取引ルートが途切れずに存在し続けてきたことを示している。もちろん、2 章で見たような公には把握することが難しい私的なかたちでの輸入も続けられていただろう。

5 ブーゲンヴィル島の仲買人（2011 年）

ロヴィアナラグーンのムシロガイをラバウルまで運ぶ際の重要な中継地点がパプアニューギニア、ブーゲンヴィル自治州のブーゲンヴィル島である。本章では、このブーゲンヴィル島に拠点を置いて現在（第 2 章で見た 2002–2006 年の後の状況）ムシロガイ取引を行なっている仲買人の活動について記述する。本章の記述は、2011 年 8–9 月に行なったある一人の仲買人へのインタビューに基づいている。彼はその時点で、ロヴィアナラグーンからラバウルへのムシロガイ取引を担っている中心人物であり、また 1970 年代から 40 年近く続いているこの長距離取引に大きな変化をもたらした。

た人物でもある。以下、1節では彼の仲買ビジネスの概要を、2節ではその手法の革新的な特徴を紹介し、3節では彼が現在の仲買ビジネスを行なうに至った経緯を記述する。最後、4節では彼のムシロガイがラバウルに運ばれ、トーライ人に売られていくまでの様子を見る。

5.1 仲買人ネルソンのムシロガイビジネス

私が話を聞くことができた仲買人はネルソンという人物で、彼は4章で話を聞いたムンダの仲買人Lが主要な取引相手として名前を挙げた人物である。彼はブーゲンヴィル島のアラワに拠点をおいてムシロガイの取引を行なっている。基本的には仕事は彼一人でやっていて、ときどき長女の婿に手伝ってもらうこともある³⁵⁾。

ムシロガイの買い付けには、アラワに程近い港町キエタから船外機付ボートに乗って行く。22フィートの船に40馬力の船外機を取り付けて350キロ以上の行程、天気良ければ早朝に出発して、日が沈む前に9時間ほどの航海でムンダまで行くことができる。ガソリンは片道でだいたい250リットル程度必要になる。ロヴィアナラグーンでの調査で聞いた話では、多くの仲買人は出入国の手続きを取らずに国境を越えてきていたが、ネルソンは必ず途中でニュージョージア島のノロという町にある警察署に立ち寄って、出入国の手続きをする。

ネルソンはムンダの町に拠点を置いてムシロガイの買い付けを行なっている。ムシロガイを買っているのはロヴィアナラグーンからだけである。彼は自分のボートでロヴィアナラグーンの村々を巡回して直接ムシロガイを買い取っている。買い取りは、きちんと乾燥された状態の良い貝だけを、空き缶で1杯ずつ計量して行なう。支払いはその場でソロモンドルの現金で行なう。前述したように、現金ではなくさまざまな商品と交換する仲買人も中にはいたようだが、ネルソンの買い取りでは、支払いはすべて現金である。

買い集めたムシロガイは、ムンダの町の拠点で25kgの穀物袋に詰め替える。これは運搬の効率を考えてのことである。25kgの袋には、100缶分のムシロガイの貝殻が入り、22フィートのボートには25kgの袋が最大で15個まで積める。めったにないことではあるが、ときにはボート1艘では積みきれないほど買える場合もある。そういうときは、船を別に1艘借りて、人も雇い、2艘でキエタまで戻ってくる。その場合の船1艘の賃料は往復でガソリン代も合わせて3,000キナ以上かかるという。

一度の買い付けでソロモンに滞在している時間は、短いときは2週間ほど、長いときは1ヶ月くらいかかることもある。船1艘でキエタとの間を往復するための燃料費

は荷物の多寡によってそれほど変わらないので、十分な貝殻を買い集めることができるまでムンダに滞在するのだという。私がこの話を聞かせてもらったのは2011年8月末のことだったが、彼はその年すでに買い付けのために6回ソロモンに渡っていた。また前年には計8回、買い付けのためにソロモンに渡ったという。

5.2 公的な形式に則ったビジネスとしてムシロガイ輸入

ネルソンの話によれば、2011年の時点でこれだけ頻繁にロヴィアナラグーンにムシロガイの買い付けに行っている仲買人は彼だけであり、ロヴィアナラグーンでのムシロガイの買い付けは彼がほぼ独占的に行なっているということであった。

私は、ロヴィアナラグーンの村々での買い付けはLらのムンダやギソのローカルの仲買人がやっており、ネルソンはそれを彼らから買い取るという分業体制を想像していた。しかしネルソンによれば、Lは既にムシロガイの買い付けを止めており、彼自身が唯一の仲買人であるという。

ネルソンはLについて、「彼は違法にムシロガイ交易をやっていた」と言う。「違法」というのは、商品をソロモン諸島からパプアニューギニアに輸出するに際してきちんと税関を通していないことからである。先述のとおり、ムシロガイの仲買人の多くはブーゲンヴィル島などからパスポートを持たずに「密入国」でソロモン諸島にやって来ている。彼らは当然、ムシロガイを持って税関を訪れることはない。とはいえ、国境近辺に暮らしている住民の国境をまたいだ移動は日常的に行なわれることであり、個人的に行き来する際にわざわざ警察に行って出入国の手続きなどとはなくとも通常咎められることはない。こういったことから、これまでの他の仲買人たちのムシロガイ輸出入は、あくまでもプライベートなかたちで国境を越え、ビジネスにはならない、課税の対象として目をつけられない範囲で行なってきたことだと言える。

ネルソンは、このような従来の仲買人と自らを明確に差別化している。彼はムシロガイの輸入を行なうための会社を設立し、ソロモン諸島とパプアニューギニアの両国に登録している。この登録に際して、彼は当局に自分の会社が取り組んでいく「ビジネスプラン」を提出している。以下はその抜粋である。

トーライ人の貝貨——ロヴィアナラグーン語ではバンガボンドゥと呼ばれる——は南ロヴィアナラグーンのマングローブで覆われた湾でのみ採れる高い価値を持った貝である。現在に至るまで、このバンガボンドゥはラバウルに住むトーライ人の伝統において重要な役割を果たすものであり続けている。ロヴィアナラグーンにおいてこの貝殻は外貨を獲得するための重要な収入源である。人々はこの貝殻を売ることによって学校の授業料や医療費など

に必要な収入を獲得している。泳ぎ、潜ることができるすべてのロヴィアナラグーンの人々にとって、このビジネスは非常に重要なものである。われわれはこの貝殻を毎月、適正な価格で買い上げ、ラバウルに輸出するつもりである。

ローカルコミュニティの経済に貢献する志という点においては、実はムンダの仲買人Lも同じようなこと——ロヴィアナラグーンの人々の生活を助ける——を言っており、また余計な仲買人を取り除くことでより安定した買い取り価格を実現するという狙いにおいてもネルソンとLにはそれほど大きな違いはない。このことから、現在の両者の差——一方のネルソンがロヴィアナラグーンのムシロガイの買い付けを独占し、他方のLが「違法」で「余計なミドルマン」として排除された——は、そのビジネスの規模や方法の違いもさることながら、公的なビジネスの形式を整える発想の有無が分岐点になったことが分かる。

ネルソンによるムシロガイ交易ビジネスの公式化の試みは、会社の設立と登記という書類上だけでなされているわけではなく、実際の商売の方法にも及んでいる。たとえば彼が取り扱うムシロガイという商品の品質管理について見てみよう。彼はムシロガイのクオリティを高いレベルで安定させることが顧客であるトーライ人の信用を勝ち取るために極めて重要であると考えている。そのために2011年8月にロヴィアナラグーンの村々にムシロガイを買い取る際の細かな方法やクオリティについてのガイドラインを文書で告知している。その文書の内容は以下のようなものである。

この通告は、ソロモン諸島のバンガボンドウ商人とバプアニューギニア、イーストニューブリテンのトーライ人コミュニティの双方が全体として良好なビジネスパートナーシップを保っていくために重要なルールである。

1. 計量にはバプアニューギニア産の「BESTA」ブランドのラージサイズの缶を使う。
2. 計量は缶にきっちり満杯に貝を入れて行なう。
3. バンガボンドウは乾燥され清潔な状態にする。「臭い」が残っていない。
4. すべてのバンガボンドウの缶や袋は、支払いの前に検査、計量を経なければならない。これはカカオやコブラの場合と同じである。
5. 「小さな」バンガボンドウは買い取らない。自動的に却下する。
6. バンガボンドウのすべての通関手続きは、バプアニューギニアに輸出する前にノロの税関で行なわれる。

ネルソンはこのように、ムシロガイが適切なサイズであること、きちんと乾燥していて清潔であること、そして統一された道具で厳密に計量されていることといった一定のクオリティをクリアしているものだけしか買い取らないことを文書化してロヴィアナラグーンの人々に通告した。ムシロガイに求められるこれらの品質は、これまで

も言わずもがなの基準として守られていたはずのものではあるが、最大手の仲買人であるネルソンが文書化して通告したことによって、ロヴィアナラグーンの人々はより厳密にこの商品の品質を意識するようになるだろう。一定の品質を満たさないものは排除するという商品としてのムシロガイの規格化は、この地域の古くからの商品作物であるコブラヤカカオと並置することで強調されている。またネルソンは、ムシロガイの最終消費地であるラバウルまで自分の目が直接届いているということを書くことで、商品の規格化が適正なものであることも同時に主張している。

こうして規格化された商品として買い取られたムシロガイは、上記の通告書の項目6にあるとおり、ニュージョージア島のノロにあるソロモン諸島の税関を通してパプアニューギニアに輸出される。通関証明書には、ネルソンの名前や彼の会社の名称、輸出される品目 (tabu shell money)、輸出されるムシロガイの重さ (〇 kg)、量 (〇 〇 bags)、輸出経路 (Noro-Kieta) などが書き込まれる。通関手続きを終えると、ネルソンはムシロガイの重みで往路よりも明らかにスピードが出なくなったボートで丸1日かけてキエタに帰っていく。

5.3 ネルソンの半生

ネルソンのインタビューで私が驚いたのは、彼がこのムシロガイのビジネスをはじめたのが実は2009年とごく最近であること、そして彼の出身がこのブーゲンヴィル島でもソロモン諸島でもラバウルでもないことであった。彼はムシロガイとは縁もゆかりもない場所からブーゲンヴィル島にやって来て、ごく最近になってからムシロガイ交易に参入し、たった2年で半ば独占的な状況を作り上げたのである。では、彼はいったいどのような経緯で、このムシロガイ交易に関わるようになったのか。このことを明らかにするために、以下では彼の半生を簡単にたどり直してみたい。

ネルソンは1953年にパプアニューギニアの首都ポートモレスビーから車で1時間ほど離れたある村で生まれた。子供時代をニューギニア島の東部北海岸のポボンデッタの親戚の家で過ごし、1967年に小学校 (grade 6) を卒業した。その後、軍隊で2年間働いた後、1970年に除隊し、当時開業したばかりのパングナ鉱山での仕事を求めてブーゲンヴィル島に渡った。十数年間パングナ鉱山で働き、そのあいだにブーゲンヴィル島のアラワ出身の女性と結婚する。

1980年代の半ば、ネルソンは鉱山の仕事を辞め、キエタの中国人が経営する商店でマネージャーとして働くようになる。1年後、オーナーの中国人が帰国する際にネルソンは店の権利を買い取り、オーナーとして日用品や食料品を取り扱う商店の経営

をはじめめる。当時はまだパプアニューギニア国内で商品の流通網が充実していなかったため、ネルソンはファックスや電話を使って、いろいろなルートで交渉をおこない、オーストラリアやニュージーランド、シンガポール、日本などからさまざまな商品を輸入していたという。オーストラリアとニュージーランドには取引で行った経験もあり、このときのビジネスはとてもよい体験になったとネルソンは言う。

だが1989年、ブーゲンヴィルクライシスが勃発するとアラワやキエタの商店は一つ残らず襲われ、収奪され尽くした。ネルソンの店も例外ではなく、彼はすべての財産を失った。先述したとおり、この時期ブーゲンヴィル島は鉱山関係の職に就いていた島外出身者はもちろんのこと、地元の間人ですら安心して生活することができない状況にあった。多くの人々と同様に、ネルソンの一家もブーゲンヴィル島を離れ、ラバウルに疎開することになる。

ラバウルには疎開者が多く集まり、北ソロモン州³⁶⁾の臨時の行政組織などもラバウルに置かれた。ネルソンはラバウルに移転したアラワ病院で働くことになった。ラバウルでは街の中心部に近いマライタウンと呼ばれる地区で生活し、1992年には病院での仕事をしながら、再び商店のビジネスをはじめた。このラバウルに滞在していた数年間、ネルソンはしばしばトーライ人が貝貨を使ってさまざまな儀礼をしている様子を目にしていたが、当時はこれをビジネスにすることになるとはまったく考えていなかったという。

次第に商店の経営も軌道に乗ってきた時期、1994年9月19日の早朝にラバウル近郊の二つの火山、タヴルヴル山とバルカン山が噴火する。このときは数日前から大きな地震が連続して起きており、火山観測所からの避難勧告も出ていたので、ラバウルでは噴火による直接の死者はほとんど出なかった。ネルソンは車で山の中腹まで上がり、展望台からタヴルヴル山とバルカン山が同時に赤い炎を噴上げて爆発するのを目撃したという。この噴火の結果、高さ5メートルとも言われるほどの大量の火山灰が降り積もり、ラバウルの街は廃墟と化した。彼が経営する商店も完全に灰の下に沈み、ネルソンは再びすべての財産を失った。

これを機にネルソンの一家はブーゲンヴィル島に帰還し、彼はアラワでの病院再開のための仕事に携わった。1997年にヘルスセンター建設の目処が立ったところでネルソンは病院の仕事を辞め、アラワで音楽機器やカセットテープなどの販売と音楽スタジオのビジネスをはじめた。それ以外に、妻の村の土地でコブラの栽培も行なっている。

彼がムシロガイ交易に関わるようになるのは2008年からである。はじめは妻の姉

の夫である Y がやっているのを見てなかなかよいビジネスだと考えるようになり、実際に Y に同行してソロモンに 2, 3 回買い付けに行った。その結果、「これはいける」と確信し、2009 年から本格的に参入するようになった。買い付けを繰り返す中で、あまりにも多くの仲買人が無秩序に買い付けに行っているためにロヴィアナラグーンでの買い取り価格が安定しないのが問題であると考えられるようになる。そして、現在のように会社を登記し、税関を通すことで、競争相手をイリーガルな存在として排斥し、独占的に買い付けを行なうことができるようになった。これが 2011 年 9 月現在の状況である。

ここで振り返ったネルソンの半生がいったい何を意味しているのかについては第 6 章で論じることとして、その前にムシロガイの輸出入のプロセスを最後まで追うこととしよう。

5.4 ブーゲンヴィル島からラバウルへ

ロヴィアナラグーンから買い付けてきたムシロガイをアラワの自宅まで運んでくると、ネルソンは家の裏にある倉庫に 25 kg の穀物袋のままストックする。私が倉庫の中を見せてもらったときには 7.5 袋のムシロガイがストックされていた。これらのムシロガイはすべて 2 週間前にロヴィアナラグーンから買って来たものであるという。

アラワからラバウルへのムシロガイの運搬は貨物船を使って行なわれる。アラワの近くにある港町キエタからラバウルまでは現在旅客船は運行されていないが、貨物船であればパプアニューギニア中の港を巡航している船が月に 1 度ほどキエタからラバウルへ荷物を運んでくれる。

ムシロガイ交易について現在ネルソンが直接携わっている仕事は、キエタの港で荷物を貨物船に乗せ、ラバウルに送ったところで終わる。ラバウルでその荷物を受け取り、実際にトーライ人に販売するのは彼のビジネスパートナーの仕事である。

ネルソンはラバウルに 1 人の信頼できるビジネスパートナーを持っており、現在はおっぱらそのパートナーにラバウルでのムシロガイの販売を委託している。このパートナーは R というトーライ人男性で、彼はネルソンの次女 E の夫である。

R と E は、ネルソンと彼の家族がラバウルに疎開していたときに会った。E はラバウルで学校を Grade 10 まで終え、ラバウルで働いていた 1993 年に当時学校の教師をしていた R と出会う。1994 年のタヴルヴル山噴火後、E はネルソンと一緒に一家でアラワに帰るが、その後も E と R は連絡を取り続け、4 年間の交際を経て 1997 年に結婚した。R は結婚後も教師として働き続けたが、パプアニューギニア中を転勤す



写真4 ネルソンの家の倉庫にストックしてあるムシロガイ（著者撮影）

る生活に疲れ、2008 年末で教師を辞め、一家でラバウルに戻ってきた。R は教師時代に貯めた資金を元手に、妻の父であるネルソンからの資金援助も受け、乗り合いバスや旅行会社などのビジネスをやりつつ、ムシロガイ販売の仕事をはじめた。現在では、このムシロガイ販売の仕事が R の主要な収入源である。

本稿の記述の対象は、ムシロガイがソロモンからラバウルまでやってくる過程であるため、R たちのラバウルでのムシロガイ販売の詳細についての記述は別稿に譲るが、第2章で見た2002–2006年に私がラバウルに滞在していたときと、2011年のムシロガイ販売の状況の違いだけは確認しておきたい。もっとも大きな違いは、ムシロガイが毎日決まった場所で販売されている点である。先述のとおり、2002–2006年にはラバウルにおいては、ムシロガイが人目につくところで、常時売られているということではなく、買うことができるかどうかは偶然に負うところが大きかった。それに対して、現在 R たちは常時、決まった場所でムシロガイを売っている。これは大きな変化である。なにか特別なことがない限りは、月曜日から金曜日まで（土曜日に売っている場合もある）の毎日、朝9時過ぎから夕方4時頃まで州都ココポのマーケットに行けば、E が台の上にムシロガイを展示して売っているのを見ることができる。R



写真5 ココボのマーケットでのムシロガイ販売の様子（著者撮影）

は在庫の量が減ってくるとネルソンに連絡し、1ヶ月も待てば新たなムシロガイが入荷されるようになっている。

6 歴史的状況の中でのムシロガイ交易

以上、第3章でヨーロッパ人と接触した19世紀後半から1970年代までのムシロガイ輸入の歴史を、第4、5章では1970年代にはじまるソロモン諸島からのムシロガイ輸入の現状およびそこに至るまでの歴史的経緯を記述してきた。ムシロガイ輸入の変遷を見てきて分かったことは、それがトーライ社会とムシロガイの原産地の間の二者関係ではなく、常にその二つの社会を取り巻くより広い地域における社会状況の変化の影響を受けて、あるいはその一部として存在してきたということであった。本章ではそのような観点から現在までのムシロガイ輸入の歴史をまとめ直してみたい。

ヨーロッパとの接触以前のトーライ人とナカナイ人との交易においては、トーライ人側の背後にはニューアイルランド島やブーゲンヴィル島との交易ネットワークが、ナカナイ人側の背後にはニューブリテン島西部の諸社会、およびそこからウムボイ島を通してニューギニア本島にまでつながる交易ネットワークがあった。トーライ人とナカナイ人との間でレアやタブソカといった貝貨とムシロガイを交換する交易は、広域の交易ネットワークの中の一部として存在していた。

この接触以前の交易ネットワークにおいては、地理的に重要な中継点となる社会

や、相対的に重要な交易品などは存在したであろうが (Kirch 1991: 141-148)、それほど明確な中心があったわけではない。トーライ人とナカナイ人の交易にしても、多種多様なモノ³⁷⁾を交換し合う、対称的な立場での交易であったと考えられる。だが1870年代以降、植民地都市として経済力をつけるにつれて、ラバウルには他の地域とは比較にならないほどの人やモノ、情報が集まるようになり、ビスマルク諸島一帯で行なわれていた交易における明らかな中心となった。経済力を背景にトーライ人とナカナイ人との交易関係は、対称的な交換から非対称的な買い付けへと変わった。従来の同地域の交易ネットワークの「外部」であるヨーロッパ世界と特権的につながることによって、ラバウルはこのネットワークの中心に位置するようになり、ムシロガイはその中心においてのみ価値がある特異な商品として、ヨーロッパの貨幣や金属製の道具を支払いとして、買い集められるようになったのである。このようにドイツ統治下のビスマルク諸島広域における社会・経済状況とトーライ社会内部での価値システムが関係する中で、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ムシロガイ交易は活性化³⁸⁾した。

だが20世紀中盤以降、それまでは上述のようにラバウルを介して接続する外部として存在していたヨーロッパ社会やグローバルな市場経済は、より直接的に各地域社会とつながるようになった。特に太平洋戦争終結後からパプアニューギニア独立の時期にかけては、飛行機や旅客船といった公共の交通機関がより一般化して広い地域の人々にとってアクセス可能になり、また各地で大規模な開発がなされたことにより、パプアニューギニアやビスマルク諸島、ソロモン諸島全体において人々の移動が活発になる。これらのトーライ人を含んだ人々の活発な移動によって、新たなムシロガイの産地が発見され、そこから輸入がなされるようになった。交易のスタイルも、単発で買い付けの遠征に行くというかたちではなく、現地にトーライ人が住みついて直接買い取る。あるいは逆に原産地の人々がラバウルに売りに来たり、仲買人が参入したりと多様化した。

こういった状況変化の中で1970年代以降、ムシロガイ交易において、さらにはパプアニューギニア、ソロモン諸島地域の交易ネットワークにおいて新たに重要な位置を占めるようになったのが、バングナ鉱山が開業したブーゲンヴィル島であった。バングナ鉱山は、先述のとおり、パプアニューギニアの外貨収入の40%以上、国家収入の20%以上を占める一大産業であり、パプアニューギニア国内に留まらずソロモン諸島からも多くの人、カネ、モノを集めた。もともとラバウルと直接的な交流がなかったロヴィアナラグーンでムシロガイが発見されたのは、多くのトーライ人が当時

バングナ鉱山で働いていたからこそである。

ソロモン諸島でムシロガイが「発見」され、ブーゲンヴィル島経由でラバウルに輸入されていたことは、トーライ人がバングナ鉱山に働きに行き、ムシロガイを発見したというトーライ人中心の説明をすることも可能である。しかし当時のブーゲンヴィル島の状況を見ると、より広い社会・経済状況の中における、人やカネ、モノ（伝統的な財³⁹）までも含む）の移動・交易ネットワークの変容の一部として理解することができる。そして、この1960–1970年代の状況下で、労働者の一人としてニューギニア島からブーゲンヴィル島にやってきたのがネルソンであった。

1960年代から現在までのムシロガイ交易の変化を見る上で、ネルソンの半生は極めて興味深い。彼の半生は、同時代にパプアニューギニアやソロモン諸島の社会において生じた変化に大きな影響を受けている。彼が生まれた村とは異なる場所で教育を受け、軍に勤務し、ブーゲンヴィル島に働きに来た時期は、太平洋戦争が終わってパプアニューギニアの独立に向けて各地で開発が進み、人々の移動が盛んになった時期と重なる。特にバングナ鉱山の開業は、彼をブーゲンヴィル島に呼び寄せた直接的な要因である。その後、ブーゲンヴィルクライシスによってラバウルに一時期避難し、そのラバウルで火山が噴火すると再びアラワに戻ってきた。

ネルソンの人生を方向付けてきたこれらの出来事は、同時にムシロガイ交易のかたちも変えてきた。繰り返し見てきたとおり、バングナ鉱山の開業はソロモン諸島ウェスタン州でのムシロガイの発見につながり、1980年代にこのルートでのムシロガイ輸入は最盛期を迎えた。しかし1989年のブーゲンヴィルクライシスによって状況は一変し、ブーゲンヴィル島を中心につながっていた交易ルートは治安の悪化によって寸断される。結果、1990年代の少なくとも前半期には、ロヴィアナラグーンのムシロガイはホニアラーポートモレスビー経由を中心に細々と運ばれるのみとなった。1990年代末から治安が回復するにつれて、再び仲買人がブーゲンヴィル島経由でラバウルへ向かうようになったが、ブーゲンヴィル島で直接ムシロガイを買うトーライ人がいなくなったため、以前よりも運ぶ距離は長くなり、仲買人の仕事は困難さを増した。ここには火山の噴火によってラバウルの経済状況が悪くなったことも少なからず関係している。私が2002–2006年にラバウルに滞在していたときに常時ムシロガイを売っている場所がなかったことの背景には、先述したようにあまり表だってタブを売買したくないトーライの人々の考えもあったであろうが、おそらくはそれ以上に一定以上の量のタブをラバウルに安定的に持ち込む仲買人がいなかったという供給の問題があったと考えられる。

ネルソンが2009年にムシロガイ輸入に参入したのはこのような状況下においてであった。従来の仲買人がロヴィアナラグーンからラバウルまでの交易のあいだの一部区間だけを、お金があるときだけ不定期に運んでいたのに対して、彼はロヴィアナラグーンでの買い付けからラバウルでの販売までのプロセスのほぼすべてを自分の管理下で、年間を通して安定的に行ない、2年間ほどで大きな成功を収めた。彼がこのようにムシロガイ輸入のかたちを変え、成功を収めることができた理由には、以下の二点を挙げることができる。

一点目は、彼がムシロガイの買い付けに行く際に出入国の手続きをし、買った商品を税関を通して⁴⁰⁾輸入したことである。これは、それまでの仲買人たちが国境を私的なかたちで行き来し、税関を通さずにムシロガイを運んでいたことと明確に異なる。ロヴィアナからラバウルにいたるまでの長距離のムシロガイ取引をすべて自分一人の管理下で行なう彼のビジネスの方法においては、投資額が大きいだけに「密輸入」であることはきわめて大きなリスクになる。彼は、法に則ったビジネスの形式を整えることで、安定的に長距離のムシロガイ取引を行なうことが可能になり、小規模に限られた地域内で活動していた従来の仲買人たちを「違法なミドルマン」として排除することに成功したのである。

二点目は、買い付けたムシロガイをラバウルで販売する安定的なルートを確立した点である。これは彼の娘がトーライ人の男性と結婚したことによって可能になった。それまでの仲買人は、ラバウルに不定期にしか行けなかったこともあり、安定的な顧客やビジネスパートナー、販売拠点を持てなかった（逆にそれゆえに散発的な商売しか出来なかったとも言える）。それに対して、ネルソンはRという信頼に足るビジネスパートナーを得ることで、定期的にラバウルへムシロガイを送り、それを現金化することで再びムシロガイを買い付けるという安定的なビジネスのサイクルを作り出すことに成功した。

ネルソンの成功が彼自身の努力や才覚によるものであることは言うまでもない。たとえば上記の一点目は、同じ状況にあった他の仲買人がやらなかったことを、彼だけが明白に意図してやったことである。ネルソン自身が、これは商店経営の経験で身につけたビジネスの知識をいかしたものだと言うように、彼の経験やセンスがこの革新を可能にしたと言えるだろう。だがその一方で見逃してはならないのは、彼の成功はその少なからぬ部分を、変化する社会状況の中で押し流されてきた半生の中で起こった偶然に負っているということである。上述の二点目はその典型である。ブーゲンヴィルクライシスでラバウルに避難したこと、そこで娘がトーライ人男性Rと出会っ

たこと、その後火山が噴火してブーゲンヴィルに戻ってきたこと。ネルソンの成功のキーポイントとなったラバウルでの信頼に足る代理人の存在は、これらの決して彼の個人的才覚に還元することはできない要素によって与えられたものである。

ここまで見てきたように、ネルソンの成功により、現在ラバウルではマーケットに行けばいつでもムシロガイを買えるという状況が生じている。この状況は、そもそもネルソンがムシロガイ交易とは縁もゆかりもないところで生まれたということまで考えれば、彼を含む多くの人間を動かしてきたパプアニューギニア、ソロモン諸島のここ半世紀ほどの社会変動の中で、偶発的な出来事が積み重なった上に、たまたま出来上がってきたものであると見ることができるだろう。

7 おわりに

本稿ではラバウルへのムシロガイ輸入に関して、その19世紀以降の歴史的な展開をパプアニューギニア、ソロモン諸島周辺で生じた社会的・経済的な変化との関係に注目して概観し、その上で今日行なわれているムシロガイ輸入の実態を記述してきた。最後にこのムシロガイ輸入の今後の行方について簡単に言及して稿を閉じたい。

2009年以降の2年間でネルソンは、ビジネスパートナーとの信頼関係や会社組織を作り上げることによって、従来よりも相対的に安定したムシロガイ輸入を可能にした。仮にこれが今後も継続し、現在Rが行なっているようなラバウルでのムシロガイ販売——常時ムシロガイが売られていて、お金さえあれば、いつでもいくらでもタブを調達することができる——が常態になれば、今後トーライ社会におけるタブをめぐる人々の実践や考え方にも変化が生じてくるかもしれない。2章で見たような、タブ・ムシロガイの売買は公然とやるべきではないという暗黙の行動規範が緩んでくれれば、それを契機にトーライ人のカスタムを体現するものとしてのタブに対する考え方も変わっていくこともありえないことではない。そういった意味で、ネルソンが起こした変化はムシロガイ輸入における画期的な一大変化——ヨーロッパ人との接触に伴う対称的交易から非対称的買い付けへの変化、パングナ鉱山開発に伴う新たなムシロガイ原産地の発見のような——と言えるかもしれない。

だが、そのように単純に結論づけることはできない。なぜなら、本稿で見てきた歴史を思い返せば予測がつくように、現在のムシロガイ輸入のあり方が今後も安定的に続いていく保証はどこにもないからである。鉱山の発見や内戦の勃発、火山の噴火などの未来については、もちろんわれわれは知るべきがない。それは起こるかもしれな

いし、起こらないかもしれない。しかしネルソンの現在のムシロガイ輸入のスタイルが、彼の半生の中で生じた予測不能の多くの出来事の上に偶然に成り立っていることを思い起こせば、むしろこれからなにも起こらないと考える方が不自然であるともいえる。もし高齢（1953 生まれ）のネルソンが長距離航海の途中で事故を起こしたら、R のラバウルでのムシロガイの販売が批判にさらされたら⁴¹⁾、あるいはネルソンと R が仲違いしたら。これらはいずれもおおいに起こりうることで、もしそうなれば状況は容易に一変するだろう。

また「もし」はネルソンのビジネス自体に直接関わる問題だけではない。たとえばムンダやギソからブーゲンヴィル島を経てラバウルに至るようなフェリーの定期便が就航したら、あるいはそもそもロヴィアナラグーンでムシロガイが採れなくなったら、もっと近隣でムシロガイが採れる場所が発見されたら、関税が高額に跳ね上がったら、イーストニューブリテン州政府が突然ムシロガイの輸入に介入したら、など。これらも、これまでの歴史的経緯を思い起こせば過去に似たようなことは何度か起こっている。これらの「もし」が起これば、やはりムシロガイ輸入のかたちはすぐに変わってしまうだろう。それゆえ、ごく近い将来に実施するであろう次のラバウルでの調査の際に、仮にマーケットでムシロガイを売っている E の姿（写真 5 参照）を見ることが出来なくても、おそらく私はまったく驚くことはないだろう。

こう考えると、ネルソンが起こした変化はムシロガイ輸入の長い歴史の中においては、一時的で局所的なブレに過ぎない出来事かもしれない。仮にネルソンが輸入をやめても、これまでの歴史が証明しているとおり、すぐに誰かがまた異なるかたちで再開するはずである。また前述したように、仲買人を介した売買目的とは異なる、私的なかたちでのムシロガイの輸入はこれからも細々とではあるが絶えることなく続けられていくだろう。今回の調査でたどることができたムシロガイ輸入の大きな流れと、それらの私的で小規模な輸入の流れの両方が存在することで、大きな社会的変化が生じた際にもムシロガイの輸入は完全には止まることなく、弾力的に継続されてきたことが推測される。その全体像を把握することは容易ではなく、また仮に把握できたとしてもすぐにそれはかたちを変えてしまうだろうが、それらの私的で小規模な輸入についての具体的なケースをひとつひとつ追っていくことが、トーライ社会へのムシロガイの流入現象を今後より深く理解していくために必要な作業になってくるだろう。

謝 辞

本稿執筆のための主たるデータは、2009年12月に実施したソロモン諸島ウェスタン州における調査および2011年8-9月にパプアニューギニア、イーストニューブリテン州とブーゲンヴィル自治州で実施した調査において収集した。これらの調査はいずれも2008-10年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「経済人類学における『交換の形式』概念の再定位：越境する貝殻／貨幣“タブ”を事例に」の助成を受けて実施したものである。ソロモン諸島での調査については、古澤拓郎氏（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）に渡航前に貴重な助言および情報をいただいたことが大きな助けとなった。また本稿執筆が可能になったのはブーゲンヴィル島でネルソン氏に貴重な話を聞かせていただいたことが大きい。このお二人を含め、調査および本稿の執筆をサポートしてくださった関係各位に対し感謝を申し上げたい。

注

- 1) ニューブリテン島中央部からニューアイルランド島、ブーゲンヴィル島にかけては、ヨーロッパ人との接触よりもはるかに古くから、黒曜石などの交易がなされていた（その頻度などは不明であるが）ということが考古学的に検証されている（Ambrose and Green 1972; Connell 1977: 81-83; Kirch 1991）。
- 2) クラヤヒリの研究が20世紀の初頭になされているのに対して、ラバウル近辺でそのような交易についての重点的な研究がなされていないことの一つの原因に、人類学者がラバウルに調査に入った時期が1960年代と比較的遅かったことが挙げられる。20世紀前半の戦間期にはミードやベイトソンをはじめ多くの人類学者がニューギニアの各地に調査に入っているが、彼らは当時の中心都市であるラバウルは調査の対象とはせずに、素通りしている。ロハチンスキ（Rohatynskyj 2000）によれば、これはヨーロッパ人と長期間にわたって接触してきたトーライ人が、もはや人類学者にとって調査するべき「真の未開状態」にはないと見なされたからであるという。
- 3) 本稿で「ムシロガイ」と表記する貝は、ムシロガイ科 *nassariidae* に属する巻き貝の中のある特定の種（一種とは限らない）を指す。この貝の名称を、アーノルド・エプスタイン（Epstein, A. L. 1963）は“*nassa immersa*”と、ソールズベリ（Salisbury 1970）は“*nassa callosa*”と、エリントンとゲワルツ（Errington and Gewertz 1995）は“*nassa camelus*”といくつかの異なる学名で呼んでいる。現在、主に用いられているロヴィアナラグーンで採れるムシロガイに限って言えば、生態人類学者のアスワニ（Aswani 2000）が“*nassa camelus*”と呼んでいるのがもっとも信用できるだろう。ただし、シメット（Simet 1991: 76）によれば、これまでタブの原料として使われてきたのは一種ではなく、ムシロガイ科の中の複数の種が使われてきているという。
- 4) 貝貨と法貨を交換する交換所もある（深田 2006）。
- 5) カスタム（*kastom*）はメラネシア地域で広く使われるビジン（pidgin）語で「伝統」や「慣習」を意味する語。ビジン語で表現されることから分かるように、この語には、ヨーロッパ社会との接触を通して再帰的に作り出されてきた伝統という側面もある。トーライ社会ではこのカスタムという語は、商売や金儲けを意味するビジネス（*bisnis*）と対比され、慣習的・伝統的な行為の価値を肯定する際に使われることが多い。とはいえ、同時にトーライ社会では、「優れたビジネスマン」であるということも褒め言葉になるため、カスタム／ビジネスは単純な道徳的な善／悪の分類とは一致しない。だが少なくとも、カスタムであるということに悪い意味が付与されることは無い。メラネシアにおけるカスタムをめぐる議論については吉岡（2005）などを参照のこと。
- 6) ムシロガイが無制限にいくらでも輸入されるのであれば、インフレーションが生じそうな

もののだが、資料で分かる限りではトーライ社会でタブがインフレーションを起こしたことはない (Salisbury 1970)。これにはいくつかの理由が考えられる。一つにはトーライ人の人口が増え続けていることがある。1960年に約4万人だった人口 (Epstein, T. S. 1968) は1992年には12万人を超えている (Epstein, A. L. 1992)。これだけ需要の絶対量が増えれば、供給が増えてもインフレーションは起こらないということである。もう一つの、そしておそらくは最大の理由は、トーライの人々は手に入れたタブを使ってモノを買うだけでなく、使わないでロロイという形態に加工し手元に貯め込み続ける傾向があることである。ある調査では、トーライ社会において日常的に使用され流通しているタブは総量の1/4に過ぎず、残りの3/4は小屋の中に退蔵されたまままだという (Post Courier 1999)。通貨の流通量が増えればインフレーションにもなるだろうが、それが貯め込まれるのであれば価値の下落には直結しないということである。

- 7) 詳しくは注40を参照のこと。
- 8) 少なくとも公的な統計資料は存在しない。このような状況ゆえ、本稿において見ていくムシロガイ輸入の状況も、その取引ルートや取引量の全容を俯瞰するようなものではないということは最初に断っておかなければならない。実際に調査において見ることができたムシロガイ交易の経路は、無数にあるはずの取引経路の中の、たまたま私がたどることができた一つのルートに過ぎない。
- 9) この地図は Mercator (<http://atlas.cdx.jp>) というフリーソフトを利用して作成した。
- 10) 丸木をくり抜いた船体の側部に安定性を増すための浮体 (アウトリガー) を付けたカヌー。
- 11) 1880年にヨーロッパ人商人と同行してナカナイまで行ったメソディスト派の宣教師ダンクスによれば、航路の途中には、遠征者が休むための休憩小屋がところどころに建てられていたという (Danks 1933: 107-122)。
- 12) 西洋の貨幣経済との接触によって、非西洋社会におけるローカルな経済システムが被る変化は、経済人類学における重要な研究主題である。ボハナン (Bohannon 1959) に代表されるように、貨幣経済の「衝撃」によって自生的な経済システムが破壊される、あるいは衰退するという見方がある一方で、むしろ新たな商品や貨幣の刺激を受けて慣習的な経済行為が以前にまして盛んに行なわれるようになったという例は、パプアニューギニアにおいてもグレゴリー (Gregory 1982) やヒーリー (Healey 1985) など数多く報告されている。
- 13) 1884年の植民地化以降、ドイツによるビスマルク諸島一帯の統治の中心は一貫してガゼル半島に置かれた。植民地化当初は、最初のプランテーションが作られたラルム地域にほど近いココボに統治政府の本部が置かれ、その後1910年に港町として開発されたラバウルに移された。また1913年にはドイツ領ニューギニア全体で5,000トンのコブラが生産されたが、このうちの4,000トンがガゼル半島のプランテーションにおける生産であったという。このことからガゼル半島は、経済的な面においても中心的な位置を占めていたといえる (Epstein, T. S. 1968: 9)。
- 14) この時期に多くの労働者がラバウルに集まっていたということは、現在のパプアニューギニアの共通語ともいえるピジン語の語彙に、トーライの母語であるクアヌア語の語彙が多く用いられていることから分かる (Mosel 1980; 岩佐 1988)。
- 15) ヨーロッパ人との接触以降、トーライ人がナカナイに持っていく交易品は金属製品などのヨーロッパの商品が増えたという (Salisbury 1970: 282; Simet 1991: 85)。
- 16) ヨーロッパ人商人はタブを自分たちで調達できなかったのも、トーライ人からタブを買わねばならず、利益の大半はトーライ人になってしまうということになる (Salisbury 1970: 285)。ここで浮かぶ疑問は、なぜヨーロッパ人商人は自分たち自身でナカナイにムシロガイを買いに行かなかったのか、である。実際、ヨーロッパ人商人も1890年代からナカナイにムシロガイ獲得に行っていたようである。しかし、ムシロガイ獲得とタブへの加工のためにはかなりの時間と人件費が必要になるということ、そして植民地行政府が発令したタブ使用禁止令のため、結局ヨーロッパ人はタブの供給に本格的には参入しなかった (Neumann 1992: 184)。これはパプアニューギニアの高地地域では、第二次大戦以前の10年間に500-1,000万個という大量の真珠貝がヨーロッパ人商人によって持ち込まれ (Hughes 1978: 316)、インフレーションを起こしたという事例とは対照的である。
- 17) オーストラリア人のパトロールオフィサーであるマックの報告には、1928-1929年当時の状況について次のように書かれている。「ナカナイは毎年訪ねて来るラバウルの原住民 (原文では native) にムシロガイ (原文では tambu) を売って得たお金を税金を支払っている。1929年にはそのボートの到着が遅くなり、また1930年にはラバウルからのボートが結局来

- なかったため、彼らにとっての唯一の現金収入源が失われた」(McPherson 2007: 134)。
- 18) この事態を問題視した植民地政府は、1899-1900年の間にトーライ人のナカナイへの渡航を禁止する命令を出した (Neumann 1992: 186)。
 - 19) とはいえ、ナカナイに決まった取引のパートナーがいて、ナカナイ滞在中はそのパートナーに贈り物を贈って世話になるというパートナーシップに基づいたムシロガイの取引は1960年代まで続けられた (Salisbury 1970; Simet 1991)。ただし、その贈り物はトーライ人から一方的にナカナイ人に貸しを作り、海に潜ってムシロガイを採らせるために贈られるもので、トーライ人はナカナイ人からの贈り物を決して受け取らなかったという報告もある (McPherson 2007: 136)。この一方的な贈り物の関係からも両者の間の非対称性を見ることができる。
 - 20) この理由について、パトロールレポートには、「ニューアイルランドやラバウルの人々が、海に潜って貝を採るよりも、ヨーロッパ人の下で働いてお金を稼ぐほうを選ぶようになったから」と書かれている (McPherson 2007: 135)。
 - 21) この交易ネットワークの中心がラバウルであったということは、たとえば金属製の道具の普及の様子を見るとよく分かる。先述したように19世紀の末の段階でトーライ人の間には一定程度金属製の道具は行き渡っていたが、ナカナイおよびナカナイを介して金属製品が流通したニューブリテン島西部地域では、1920年代末にもまだ十分には行き渡っていなかったようである。1929年のパトロールレポートではニューブリテン島西部のキレンギ (Kilengi) 地区とウンボイ島の間で黒曜石が交易されていることが報告されている。このことについてパトロールオフィサーは次のように記録している。「今でも黒曜石がナイフとして用いられていることに驚いた。その価値は落ちたとはいえ、今でもキレンギの人々の間では黒曜石のナイフがクンドゥ (木製の太鼓) の表面を滑らかに削るために使用されている」 (McPherson 2007: 133)。
 - 22) ソールズベリによれば、1961年の時点で、わざわざナカナイに遠征に行くのは伝統を重んじる (そしてあまり大きなブランドションを持っていない、暇な) 老人か、まだ定まった仕事無く「世界を見る」ために2-3ヶ月のまとまった時間をとれる若者だけだったという (Salisbury 1970: 283)。
 - 23) わざわざラバウルまで来るのは、採集した現地で売るよりも、ラバウルに来て売った方がはるかに高い価格で売れるからである (Simet 1991)。
 - 24) だが、このようなかたちでの西ボミオ地域からのムシロガイの輸入が行なわれたのは2回だけだったという。中国人商人もこの政府の介入で輸入・販売をやめてしまったため、同地域のムシロガイを買い付ける人は誰もいなくなった (Simet 1991: 91-96)。
 - 25) 第2章で見たとおり、2002-2006年の調査においてラバウル側からはムシロガイ輸入の具体的な経路をたどる糸口を掴むことが出来なかったため、ムシロガイの原産地であるソロモン諸島側からたどることにしたわけである。はっきりと特定できなかったムシロガイの原産地がソロモン諸島ウェスタン州のロヴィアナラグーンであるという情報は、当地をフィールドにしている生態人類学者の古澤拓郎氏から教えていただいた。
 - 26) トーライ人の人類学者シメットによれば、タブに適したムシロガイは「唇部が輝く白色で螺旋部は明るい茶色 (Simet 1991: 79)」が望ましいとされているという。ナカナイ産のムシロガイはこれに合致するものである (というよりはナカナイ産のものが理想ということだろう)。ソロモン諸島産のムシロガイは「唇部が赤みがかり、螺旋部が暗めの茶色で、ナカナイ産のものよりも若干サイズも大きめ」だったので1970年代に導入された当初はあまり好意的に受け容れられていなかったが、流入量が多くなるにつれ、既成事実として受け容れられるようになったという (Simet 1991: 81-82)。今日ではソロモン諸島産のムシロガイの色、形に文句を付ける話を聞いたことはない。
 - 27) 全長6-7メートル、幅1.5-2メートル程度のFRP製のボートの後部に船外機を取り付けたもの。
 - 28) アスワニによれば、ロヴィアナラグーンのある村では17-65才の村民は一週間に平均して4-5日、一日平均で男性は12時間、女性は14時間、採集のために海に潜っているという (Aswani 2000: 15)。
 - 29) 第3章で概観したような歴史的な経緯もあり、現在でもラバウルは様々な学校や機関が置かれた南太平洋地域の中心都市のひとつである。距離的には離れているとは言え、ロヴィアナラグーンの人々にとってもまったく関係がない場所ではない。実際、私が訪ねたO村ではラバウルへ学校教育を受けるために、あるいは教会のイベントなどで行ったことがあると

- いう人が複数人いた。
- 30) アスワニによれば、O村では全家庭のうちの86%がムシロガイの採集を行ない、75%の家庭においてもっとも重要な収入源になっているという (Aswani 2000: 15)。
 - 31) これは人によって答えに大きな違いがあったので、実際のところどの程度採れるのかは短期の調査では把握することが出来なかった。
 - 32) 2009年の調査の時点では、ロヴィアナラグーンではムシロガイの採集についての制限や規則は存在していない。枯渇する心配はないのかということを村の人々に繰り返し聞いてみたが、そのような心配をしている様子は感じられなかった。
 - 33) 私がいろいろな人に話を聞いている限りでは、仲買人は英語で「バイヤー buyer」と呼ばれることが多かった。敢えて「ミドルマン middleman」と呼んだ場合には、「間に立って不当な利益を得ている」という悪いニュアンスが少なからず込められている場合が多いように感じた。
 - 34) ホニアラを経由するとムンダーホニアラ—ポートモレスビー—ラバウルと大変遠回りになり、その分航空運賃もかさむ。
 - 35) 娘婿はソロモン諸島のマライタ島出身で、現在はアラワの近くのキエタという港町で学校の教師をしている。ブーゲンヴィル島とソロモン諸島の間では交易のみならず、結婚などのかたちでの人の往来も盛んである。
 - 36) 現在のブーゲンヴィル自治州。
 - 37) ニューギニア地域のこうした交易において、交換されていた品物の多種多様さについてはHarding (1994) や小林 (1993) を参照のこと。
 - 38) だが、トーライ人の経済生活がグローバルな市場経済と直接的に結びついたことは、その逆の作用をもたらすこともあった。たとえば世界恐慌の際にはコブラ価格の暴落がトーライ人の経済生活を悪化させ (Epstein, T. S. 1968: 12)、1929–30年にかけてはナカナイへのムシロガイ買い付けが控えられたという (McPherson 2007: 134)。そうなるナカナイ人にとっての唯一の現金収入源が絶たれ、人頭税も支払えなくなってしまうという状況に陥る (McPherson 2007: 134)。グローバルな経済状況の変化がトーライ人とムシロガイ交易を通して、ナカナイ人の生活に影響を与えているという構図が成り立つと言える。
 - 39) 当時のブーゲンヴィル島の経済的な求心力は、ムシロガイ以外の貝貨の交易の様子からもうかがい知ることができる。ブーゲンヴィル島 (の少なくとも南部) で婚資や賠償などで用いられる貝貨はソロモン諸島の諸地域で広く用いられているのと同じ、マライタ島のランガラ地域で作製されるものである。太平洋戦争の前までは、このランガラ島の貝貨はニュージョージア島やショートランド諸島の仲買人の手を経て、細々とブーゲンヴィル島に輸入されていた。しかし1950年代後半からブーゲンヴィル島でカカオのプランテーションの開発がはじまり、さらに1960年代バングナ鉱山が開業すると状況は一変した。景気が良くなったブーゲンヴィル島における貝貨の販売価格が急上昇したため、貝貨を作製しているランガラの人々が飛行機や定期船を使って、直接ブーゲンヴィル島まで貝貨を売りに行くようになったのである。1960–70年代には、ランガラ製の貝貨の実に80–90%が、ソロモン諸島の他地域を差し置いてブーゲンヴィル島に輸出されていたという (Connell 1977: 92)。いわばロヴィアナラグーンの人々が1980年代に大挙してブーゲンヴィル島にムシロガイを売りに行ったのと同じような状況——そこにいけば金回りの良い人たちがいて、確実に高値で貝貨が売れる——があったわけである。ただムシロガイと決定的に違う点は、ムシロガイを欲しがるのはトーライ人だけなのに対して、ランガラ島の貝貨はソロモン諸島の他地域の多くの人々も欲しがっているというところである。ランガラ島の事例の方が、他にも選択肢がある中で敢えて行っているという点で、当時のソロモン諸島におけるブーゲンヴィル島の経済的な求心力をよりよく示していると言える。
 - 40) 関税は、貨物船で運ばれたムシロガイをラバウルで受け取るときに税関で課されることが多い。この関税の額はそのときどきで異なり、課税されないときもあれば、かなりの高額を支払わされることもあるという。ムシロガイをラバウルで受け取っているRによれば、直近の2011年8月にネルソンから送られてきた11.5袋のムシロガイに対して、GST (Goods and Service Tax) と関税で合わせて2,210キナ支払わされたという。その前回の受け取りの際には17袋のムシロガイに対して5,400キナを課されたという。それ以前は関税を取られないこともあったのに、急に高額な税を課されたので、今回は受け取りに税理士を連れて行って額を交渉したのだという (17袋で5,400キナだと1袋あたり317キナだが、11.5袋で2,210キナだと1袋あたり192キナ)。この件について、ネルソンとRは納得しておらず、

既に裁判所に訴えを出している。

- 41) 第2章で見たムシロガイの取り扱い方についてのトーライ人の倫理的感覚などを鑑みると、現在Rがラバウルで展開しているムシロガイ販売が今後批判にさらされるということはおおいにあり得ることである。

参考文献

- Ambrose, W. R. and R. C. Green
1972 First Millennium BC Transport of Obsidian from New Britain to the Solomon Islands. *Nature* 237(5349): 31.
- Aswani, Shankar
2000 Women, rural development and community-based resource management in the Roviana Lagoon, Solomon Islands: Establishing marine invertebrate refugia. *Traditional Marine Resource Management and Knowledge Information Bulletin* 12: 11–22.
- Barton, F. R.
1910 The annual trading expedition to the Papuan Gulf. In C. G. Seligmann (ed.), *The Melanesians of British New Guinea*. pp. 96–120. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bohannan, Paul
1959 The impact of Money on an African Subsistence Economy. *The Journal of Economic History* 19(4): 491–503.
- Connell, John
1977 The Bougainville Connection: Changes in the Economic Context of Shell Money Production in Malaita. *Oceania* 48(2): 81–101.
- Danks, Benjamin
1888 On the Shell-Money of New Britain. *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland* 17: 305–317.
1933 *In Wild New Britain: the story of Benjamin Danks, pioneer missionary, from his diary*. Seane, W. (ed.), Sydney: Angus & Robertson.
- East New Britain Provincial Administration
2003 *Terms of Reference for the Tabu Research Project (Second Phase)*.
- Epstein, Arnold L.
1963 Tambu: A Primitive Shell Money. *Discovery* 24: 28–36.
1969 *Matupit: Land, Politics, and Change among the Tolai of New Britain*. Berkeley: University of California Press.
1992 *In the Midst of Life: Affect and Ideation in the World of the Tolai*. Berkeley: University of California Press.
- Epstein, Scarlett T.
1968 *Capitalism, Primitive and Modern: Some Aspects of Tolai Economic Growth*. Canberra: Australian National University Press.
- Errington, Frederick and Deborah Gewertz
1995 *Articulating Change in the "Last Unknown."* Boulder: Westview Press.
- 深田淳太郎
2006 「パプアニューギニア，トーライ社会における貝貨タブをめぐる現在の状況」『くにたち人類学研究』1: 1–22。
2009 「つながる実践と区切り出される意味——パプアニューギニア，トーライ社会の葬式における貝貨の使い方」『文化人類学』73(4): 535–559。
2011 「使えない貨幣と人の死」春日直樹編『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィーへ』pp. 225–245. 京都市：世界思想社。
- Furusawa, Takuro and Ryutaro Ohtsuka
2006 Inter-household variations in subsistence strategies within a rural society of Roviana, Solomon Islands: An analysis of agricultural production and cash income in relation to socio-demographic factors. *Tropics* 15(1): 29–37.

- Gregory, Christopher A.
1982 *Gifts and Commodities*. London: Academic Press.
- Harding, Thomas G.
1994 Precolonial New Guinea Trade. *Ethnology* 33(2): 101–125.
- Healey, Christopher J.
1985 New Guinea Inland Trade: Transformation and Resilience in the Context of Capitalist Penetration. *Mankind* 15(2): 127–144.
- Hogbin, Ian H.
1935 Trading Expeditions in Northern New Guinea. *Oceania* 5(4): 375–407.
- Hughes, Ian
1978 Good Money and Bad: Inflation and Devaluation in the Colonial Process. *Mankind* 11(3): 308–318.
- 岩佐嘉親
1988 『ニューギニア語入門』東京：泰流社。
- Kirch, Patrick V.
1991 Prehistoric Exchange in Western Melanesia. *Annual Review of Anthropology* 20: 141–165.
- 小林繁樹
1993 「メラネシアの伝統的貨幣と交換」石川榮吉監修・須藤健一・秋道智彌・崎山理『オセアニア2 伝統に生きる』pp. 95–110, 東京：東京大学出版会。
- マリノフスキ, ブラニスワフ
2010 『西太平洋の遠洋航海者』増田義郎訳, 東京：講談社 (1922 *Argonauts of the Western Pacific*)。
- McPherson, Naomi
2007 Myth, Primogeniture and Long Distance Trade-Friends in Northwest New Britain, Papua New Guinea. *Oceania* 77(2): 129–157.
- Mosel, Ulrike
1980 *Tolai and Tok Pisin: The Influence of the substratum on the development of New Guinea pidgin*. (Pacific linguistics B-73) Canberra: Australian National University Press.
- Neumann, Klaus
1992 *Not the Way It Really Was: Constructing the Tolai Past*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Post Courier
1999 "East New Britain Province may approve traditional shell money as legal tender." November 16.
- Rohatynskyj, Marta A.
2000 The Enigmatic Baining: The Breaking of an Ethnographer's Heart. In Sjoerd R. Jaarsma and Marta A. Rohatynskyj (eds.), *Ethnographic Artifacts: Challenges to a Reflexive Anthropology*. pp. 174–194. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Salisbury, Richard F.
1970 *Vunamami: Economic Transformation in a Traditional Society*. Berkeley: University of California Press.
- 塩田光喜
1991 「大地の破壊, 民族の創成—1988～1990年ブーゲンヴィル島分離独立運動の経過と本質」『アジア経済』32(12): 25–47。
- Simet, Jacob
1991 *Tabu: Analysis of a Tolai Ritual Object*. (Unpublished Ph. D. thesis) Canberra: Australian National University.
- 吉岡政徳
2005 『反・ポストコロニアル人類学—ポストコロニアルを生きるメラネシア』東京：風響社。